



本プログラム創設者、日本代表
小林 登
(東アジア子ども学交流プログラム日本代表、CRN所長)

医学博士。チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)所長、東京大学名誉教授。1954年東京大学医学部医学科卒業。米英留学。東京大学教授、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞(1984年11月)、毎日出版文化賞(1985年10月)、国際小児科学会賞(1986年7月)、勲二等瑞宝章(2001年秋、武見記念賞(2003年12月)などを受賞。主な著作は、小児医学専門書以外には「ヒューマンサイエンス」(中山書店)、「子どもは未来である」(メディサイエンス社)、「育つ育てるふれあいの子育て」(風濤社)、「風韻児」(子どものいのちを見つめて)「小学館」・「子どものまなこ」(明石書店)その他多数。

東アジア子ども学交流プログラム・2010年度報告書を出版することは喜びに耐えない。代表として、ひと言挨拶を述べる。

2010年度は、東アジア交流プログラムの第6回会議を、中国側の御協力のおかげで、北京で開催できた。歴史と伝統ある中華女子学院の立派な講堂で、11月23日、24日の2日間にわたり実施され、ほぼ満席になった。2日目の午後は、保護者向けの一般公開であり、中国側から、家庭教育における食育と子どもの潜在能力開発についての講演、続いて日本側の参加者も加わって、会場の出席者と活発な質疑応答が行われた。また「日本グッド・トイ展示会」もこの間に行われ、多くの見学者が集まった。

第6回のメインテーマは「幼小接続」であったが、残念ながら従来通り、日・中の研究者のみによる会議となった。子どもの教育は、生まれた時点からの親による育児、専門家による保育・就学前教育と続くが、それは子ども

の発達に対応して、ひとつの流れとして連続的でなければならない。しかし、幼児の保育・教育と小学校教育の連続性は、理念ばかりでなく実践などの制度・方法により、如何なる国においても、しばしば問題になるのである。この会議で明らかになったのは、この幼小接続の問題は、当然と言えば当然であるが、日中では全く異なっているというところで、考えさせられる点が多かった。それは、文化ばかりでなく社会の在り方の違いによると考

えられるが、ぜひこの報告書を読んで、幼小文化の移行という立場から、皆さん方にもお考え頂きたい。

そもそも、東アジア子ども学交流プログラムは、現在では日本と中国が中心となっているが、東アジアのそれぞれ文化の異なる国々の研究者・実践家が、学際的、包括的な「子ども学」の立場で、それぞれの国の「子ども問題」child issues、解決に必要な情報を交換し、考える場である。お互いに比較し合うことで、学ぶ点も多いことは、どなたも賛成しよう。この報告書が、その情報提供の役を少しでも果たせることを願いたい。



中国代表

朱家雄

(東アジア子ども学交流プログラム中国代表、華東師範大学教授)

報告書刊行にあたって

華東師範大学教授、学前教育研究所長。中国学前教育研究会副理事長。上海市幼兒教育研究会副會長兼秘書長。中国教育部の国家プロジェクトである「学前教育学科養成目標・基準とカリキュラムの研究および実践」幼兒教育改革実践研究」などを担当する。

2010年11月、中国の首都北京で東アジア子ども学交流プログラムの6回目の会議が成功に開催されました。今回の国際シンポジウムのテーマは「幼小接続―教育の公平性と質の関係から」であり、日中両国からの参加者の人数が両日合わせて1500名にもなりました。政治学、社会学、教育学、小児科学などさまざまな分野の視点から幼稚園と小学校の接続問題について議論され、解決案と解決方向が検討されました。今まで行われた交流プログラムと同じように、今回の会議も社会の各領域から大いに賞賛され、ハイレベルな学術集会として認められました。

ここ数年、私は東アジア子ども学交流プログラムの中国側の代表者として、東京大学名誉教授・日本国立小児病院名誉院長、CRN所長である日本の著名な小児科医の小林登先生が提唱する「子ども学」が、日本と中国大

陸で次第に多くの人々に受け入れられていることを嬉しく存じます。日中両国の学者および社会各領域の関係者の協力のおかげで、実りの多い成果を上げていると言えるでしょう。この交流プログラムは、(株)ベネッセコーポレーションから支援をいただき、中国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、日本異文化比較学会、日中教育交流会議等の協賛を受け、社会各分野から承認され、賞賛されています。これは「子ども学」の普及と国際化が子どもたちとその発達、また社会にとって役立つことが証明されている表れです。

今回のシンポジウムには「親向けの育児相談コーナー」を設けました。この東アジア子ども学交流プログラムでは、初めての試みで、当日300名近くの保護者が熱心に会議に参加し、専門家の報告に耳を傾けました。また彼らが日ごろ育児の中で、感じていること、

困っていること、悩んでいる問題などについて、専門家に質問し、アドバイスを求めました。数10年間続いてきた学問の細分化した結果は、各領域の研究が深い方向に進めることができる一方で、学問間の横のつながりが断ち切られた現実も否めません。小林登先生が提唱された「子ども学」に賛同するのは、この学問が自然科学、社会科学と人文科学を有機的に結合することを主張し、育児に関する諸問題が総合的に研究し、解決することができると思うからです。

「子ども学」がさらに社会的に認められ、日中両国のさまざまな分野の関係者が交流するチャンスがますます増えることを願っています。我々が力を合わせて努力すれば、「子ども学」がいつそう豊かな成果を収めることができるかと確信しています。

東アジア子ども学交流プログラム2010

大会テーマ…幼小接続―教育の公平性と質の関係の視点から

巻頭言

000

第1章 ● 日本の現状と課題

003

小林 登

子どもは2つの情報によって育っている―遺伝と文化

004

秋田 喜代美

幼児期から児童期への教育―子ども・保護者・教師の経験から考える幼小文化間移行

010

榎原 洋一

小一プロブレムと発達障害

016

第2章 ● 中国における教育の公平性と質の問題

023

朱家雄

幼小接続についての考察

024

馮曉霞

義務教育の機会均等と入学準備

030

張燕

都市は、流動児童に基本的な就学前教育を提供できるのか？―平民教育は教育の公平性を実現するための選択肢である

035

王練

流動児童の親の子どもに対する期待と教育の現状調査―北京市のある村を例に

043

周念麗

就学前教育の公平性についての考察―湖南省37～48か月の幼児1000名を対象にした発達調査

049

鄒平

幼小の資源共有・双方向連携で、小学校入学への適応力を高める

055

万鈞

公開シンポジウム…講演1 食育―食することで健康な体をつくる

060

朱家雄

公開シンポジウム…講演2 子どもの早期能力開発

064

公開シンポジウム…会場での質疑応答

066

会場の声

070

日本グッド・トイ展示会

073

1 日本

第1章 日本の現状と課題

【主催】 チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）、中華女子学院（中国・北京）
【日時】 2010年11月23日（火）、24日（水）
【場所】 中華女子学院（中国・北京）
【テーマ】 幼小接続―教育の公平性と質の関係の視点から―
2日間にわたって、日本と中国の専門家による最新の研究調査について7つの講演と、2つのワークショップがありました。第1章では、日本における幼小接続の問題に焦点をあてます。



第六届东亚儿童科学国际研讨会
The 6th International Conference of the East Asia Child Science

幼小衔接・教育质量・教育公平

中国・北京
2010.11

主办单位：中华女子学院 本儿童科学研究所
Unit: Women's University of China Research Institute of Child Science



子どもは、2つの情報によって育っている

― 遺伝と文化

小林 登

.....Kobayashi Noboru

チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)所長、東京大学名誉教授

◎子どもは生物的存在として生まれ、 社会的存在として育つ

世の中にかかる現象は、いろいろな立場で捉えることができる。現在のような情報化の激しい時代では、情報やシステムの立場から、我々の関心事である子どもの成長・発達や、育児・保育・教育を捉えることも重要であろう。

子どもは生物的存在として生まれ、社会的存在として育てられ、育つ。すなわち、子どもは生物的側面と社会的側面の2つをもち、それぞれ異なった情報基盤があるのである。

生物的存在とは、人間進化の長い歴史の中で獲得した遺伝子の情報によって決まる心と体のプログラムをもって生まれる存在として人

間を位置づけることである。それは、育児・保育・教育の影響をほとんど受けていない胎児・新生児の行動をみれば明らかであると思う。

最近の医療技術の進歩によって、母親の胎内で育つ胎児の行動を超音波画像で捉え、しかも3次元の姿で見ることができるようになった。それによって、妊娠中、子どもが胎芽期を過ぎて胎児期



に入れば（妊娠9週から満期40週）、手・足の動きや心臓の拍動などが、胎児期後期に入れば、手を口に持っていく運動や、胸部の呼吸の運動、その上、微笑むような表情、苦しむような表情さえも示すのである。

受精卵が2つに分割され、その後の細胞分裂の繰り返しによって細胞は増殖する。そして、それぞれの細胞の分化により多様な機能をもつようになり、必要な機能をもつ細胞を組み合わせ、脳、心臓、肺、肝臓、腎臓、胃腸管、骨・筋肉などの諸臓器が形成されて、胎児の体が組織化される。それと共に、脳の中では、心臓・肺などの生理機能によって生命活動をさせられる、さらには手・足を動かすなどの体の基本的なプログラムばかりでなく、快・不快から始まって知・情・意の豊かな心の基本的なプログラムも組織化されると言える。

組織化は、遺伝子の情報によって細胞のシステムを作ることである。この場合、心と体のプログラムを、どのように解釈すれば良いのだろうか。心のプログラムとは、知性や理性、本能や情動などの心に関係する脳の中の特殊な細胞、すなわちニューロン（神経細胞）のネットワーク・システムを情報によって働かせて、心の状態を発現させるものであり、体のプログラムとは、脳の中ばかりでなく、脳の外の体にはりめぐらせたニューロンのネットワーク・システムを情報によって働かせて、運動や行動を発現させるものである。

脳は、脊椎動物に進化して現われた情報を処理する臓器であり、そ

の出発点の魚や爬虫類などは、体の生命活動をコントロールする間脳と、体の動きをコントロールする大脳底部にある大脳基底核などを結合させた「生命・運動脳」をもっていたと言える。

カンガルーやコアラのような原始的な哺乳動物に進化して、生存力を高め、たくましく生きるためには、体のプログラムの働きを強化する必要があった。そのため、本能・情動に関係する心のプログラムをもった古い皮質（特有な構造をもつ臓器の表層）、すなわち「大脳辺縁系」が進化して生命・運動脳をカバーして、「本能・情動脳」が形成されることになった。

本能の性欲に関係する心のプログラムは、子孫を増やすのに必要であり、食欲の心のプログラムは、体を作り、生きていくのに必要であった。情動の中でも優しさや愛というような心のプログラムは、仲間との関係を維持して共同生活するために、怒りや攻撃などの心のプログラムは、自然や、自分の存在を脅かす異種の動物などと闘うために必要だったと言えるのである。

犬や馬のような高等哺乳動物に進化すると、環境に適応し、群を作って同種の動物との関係を保つばかりでなく、異種の動物との関係をはかることも可能になる。うまくよく生きるために、知性・理性の心のプログラムをもつ新しい皮質が進化して、本能・情動脳をカバーし、「知性・理性脳」が形成されたと考えられる。

この3つの脳を進化させる流れの中で霊長類の共通祖先が1400万年前に現われ、約700万年前にチンパンジーとヒトに分かれ、人間進化の道をたどったのである。人間進化の柱は、二足歩行や言葉の進化ばかりでなく、快・不快の心から出発して、現在我々のもっている知・情・意の豊かな心への進化もある。すなわち、知性・理性脳が極限まで進化したのが我々の脳で、道具を使うことから始まって、文化・文明を広く作り出す能力ももったのである。10万年から3万年前に住んでいた旧人が、死者を弔い花を手向ける心をもち、4万年前の新人が、洞窟絵画や彫刻を作り、歌・音楽・踊りなどの芸術的な営みを行い、宗教的な象徴の女性像（ヴィーナス・フィギュア）などを用いた遺跡を考えれば、心の進化の流れを理解できよう。

しかし、依然として我々の脳の中には、生命・運動脳、本能・情動脳、知性・理性脳の三層構造があり、そのバランスの中で、社会で生きる営みを行っていると言える。したがって、お互いのバランスの狂いによっては、いろいろな問題も起こり得るのである。

胎児の心の基本的なプログラムの組織化については、多少疑問をもたれる方もあろう。前述の胎児の顔の表情ばかりでなく、テレビを見ている妊婦のおなかの中にいる胎児の心拍動リズムの変化が、テレビの音楽の変化によって現れることでも示される。子宮内の出っばりに

頭を引っかけ、手をつっぱり、足をつっぱりして外そうとして、胎児が頭部をまわして外したという記録もある。出生時の新生児の産声も、助産師や母親に抱かれることによって泣き止み、そして泣き止んだ新生児は、周囲をゆっくりと見まわす行動をとることさえある。これらの事実は、快・不快ばかりでなく、音楽を感じる心の基本的なプログラム、さらには考える、恐れる、好奇心をもつなどの心の基本的なプログラムも、胎児・新生児はもっていると言える。

当然のことながら、胎児の微笑みは、あやされて笑う乳児の笑いとは同じではない。この世に生まれ育てられている内に、育児・保育・教育によって与えられる情報によって、快から出発した基本的な心のプログラムがいろいろと組み合されて、我々がもっているような複雑な笑いの心のプログラムができるのである。当然であるが、知性・理性の心のプログラムも組み合わせられると考えられる。漫画で笑う小学生、落語で笑う高校生を考えれば明らかであろう。

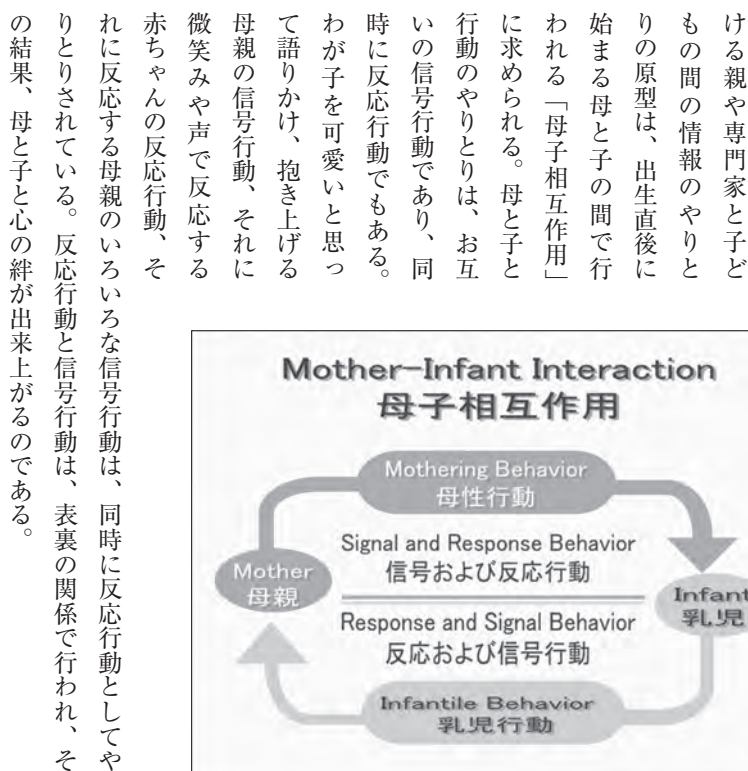
社会的存在とは、家庭や社会の文化的情報によって、育児・保育・教育を介して育てられて育つ存在と人間を位置づけることである。この世に生まれ出た子どもは、生まれながらもっている心と体の基本的なプログラムを、育児・保育・教育の情報によって働かせながら組み合わせ、人生の中で出合うであろう事態に対応できる心と体の、より複雑なプログラムを作ると考えられるのである。

●育児・保育・教育の役割

こう考えると、育児・保育・教育によって、子どもに与えられる情報の果たす役割は重要である。それは、家庭での親や家族などの、また保育園・幼稚園など専門家の文化の情報であることは明らかである。親の育児や保育士の保育では、子どもの脳は未熟であり、お互いのふれ合いなど人間としてもっている行動による生物学的（身体的）情報のやり取りが柱である。しかし、保育園・幼稚園・学校と子どもが成長・発達するにつれて、生活文化、社会文化の中の情報を、教育情報として整理・加工して子どもたちに与えていることになる。

したがって、子どもの言語発達と情報との関係は重要で、情報は「理性の情報」「Logical information」と「感性の情報」「Emotional information」とに分けて考えるのが良い。言葉のやりとりを考えると、それは理解されやすいように思える。例えば話している内容は「理性の情報」であり、その時の声のリズム・ピッチ・メロディなどの情報、さらに「手・足の動き」「おんぶ」「だっこ」「なでる」など行動で与えられる感覚は「感性の情報」である。優しくあやしている時と叱っている時の声などを比較してみれば明らかであろう。感性の情報は、理性の情報の機能を強化する役割を果たしていると言えるよう。

育児・保育・教育にお



保育園における保育士と子ども、幼稚園・学校における教師と子ども
のやりとりも基本は同じで、母子相互作用は拡大されていく。年齢
とともに心も言葉も発達すると、感性の情報と理性の情報は、それぞ
れ大きな役割を果たすようになる。したがって、相互作用では、お互

いに心を読みとる力（「sensitivity」／心の理論）と、言語・行動などのやりとりが重要であり、感覚系と運動系を介して行われる。

◎子どもの発達にとって重要な2つの情報 ―遺伝と文化

このように、子どもの体の成長と心の発達にとって重要な情報を遺伝子の情報と文化の情報とに分けたが、別の見方をすれば、それらは「身体内情報」「intracorporal information」と「身体外情報」「extracorporal information」とに分けることができる。生物的存在としての子どもは、遺伝子の身体内情報で体を成長させて、同時に脳と体にあるニューロンのネットワークを働かせる心と体の基本的なプログラムを脳の中に作るのである。この世に生まれてからは、社会的存在として身体外の文化の情報で、脳の中にもって生まれた心と体の基本的なプログラムを働かせながら組み合わせ、いかなる行動や運動もとれる複雑な体のプログラム、そして豊かな心のプログラムを発達させていく。したがって、子どもの成長・発達には、良い栄養ばかりでなく良い情報も必要なのである。

しかし、身体内情報（遺伝情報）は、進化の流れの中で長い時間をかけて出来上がったものであるが、身体外情報（文化情報）は、人から人へ、世代から世代へと伝承される短い時間の中でも変わり得るものであることを忘れてはならない。

（付記：R. Dawkins は、文化の情報は、遺伝子と同じように、文化の基本を決める情報の集合体のような「meme、（ミーム）」によって伝承されるという考え方を発表しているが、都合により省略した。ミームを筆者は、「模伝子」と訳した。文化は模倣の心のプログラムを中心に、学習、教育、記憶、言語などに関係する心のプログラムと共同して、人から人、世代から世代に伝承されると考えられるのである。文献：リチャード・ドーキンス、『The Selfish Gene、『利己的な遺伝子』、日高敏隆他訳、紀伊国屋書店、1991）

小林 登



医学博士。チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）所長、東京大学名誉教授。1954年東京大学医学部医学科卒業。米英留学。東京大学教授、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞（1984年11月）、毎日出版文化賞（1985年10月）、国際小児科学会賞（1986年7月）、勲二等瑞宝章（2001年秋）、武見記念賞（2003年12月）などを受賞。

主な著作は、小児医学専門書以外には『ヒューマンサイエンス』（中山書店）、『子どもは未来である』（メディサイエンス社）、『育つ育てるふれあいの子育て』（風濤社）、『風韻怎思——子どものいのちを見つめて』（小学館）、『子ども学のまなざし』（明石書店）その他多数。

幼児期から児童期への教育――

子ども・保護者・教師の経験から考える幼小文化間移行

秋田喜代美

東京大学教授

.....Akita Kiyomi

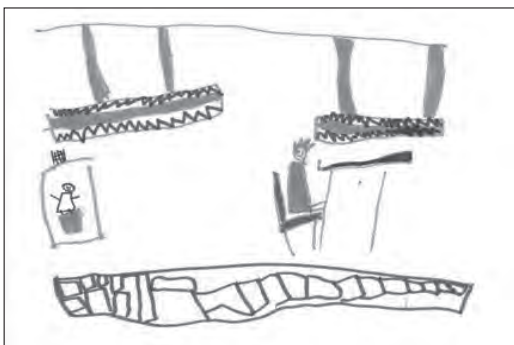
●子ども・保護者・教師の文化間移行経験

幼小接続は、子どもや保護者の側から見れば園文化から学校文化という新たな文化への環境間移行であるということができる。そこで園と学校の両文化間を移行する人の経験から、保幼小の文化の差異が日本ではどのように経験されているのかを前半でお話したい。子ども、保護者、教師の順にお話をさせていただきます。

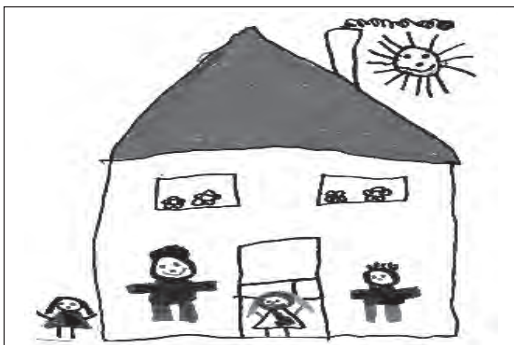
イギリス (Sharp, 2004) やドイツ (Niesel, 2000) では、幼小連携を子どもの描画や一対一での面接によって生の多様な声から聴きと

る研究がなされてきている。それらの研究結果からは、子どもにとって遊びから学習への移行に伴う差異の実感と園と学校の表象の相違が明確に表れている。では日本の子どもたちはどのような経験をしているのだろうか。筆者らが日本3地域で子どもが幼稚園卒園前2か月と小学校入学後2か月においてどのように現在を描き、幼小の差異を語

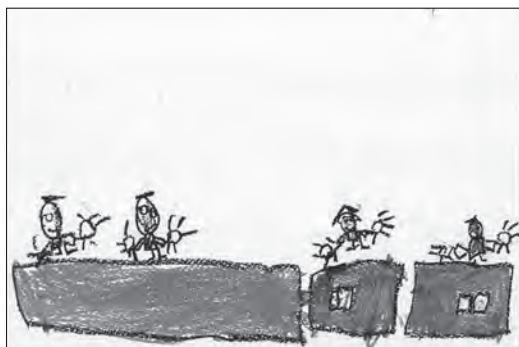
り、入学の不安を語るのかを検討した研究プロジェクト (秋田、2009、2010) を



■イギリスの子どもの作品
「たくさん勉強で大変」「教室環境が違う」(Sharp, 2006)



■ドイツの子どもの作品「宿題と乱暴な男」(Fried, 2010)



■日本の子どもの作品(秋田他, 2009)
「友たちと遊ぶ」「花粉症で外に出られない」

紹介したい。本研究プロジェクトは、科学研究費の助成を受けて子どもと保護者に協力をいただき、2回の短期縦断面接研究を実施した質的研究である。また幼児教育制度やカリキュラムの点で日本と最も類似している台湾においても、同じ研究方法で台北市立教育大学・辛曼玲教授との共同研究を実施し、比較検討を行ったものである。

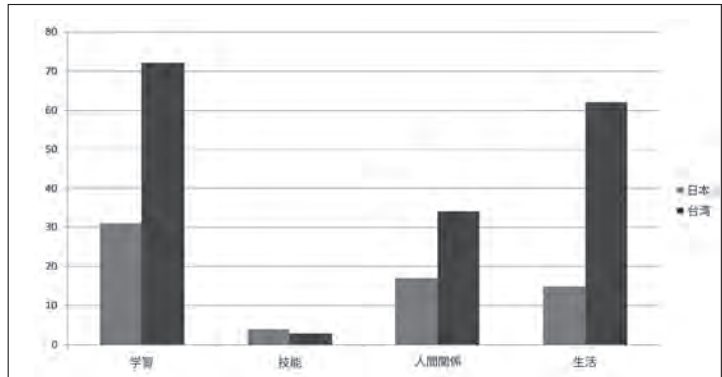
小学校入学後に幼稚園と小学校での差異を

子どもに訪ねた回答結果からは、まず子どもたちは「さまざまな教室がある。廊下が長い」など物理的環境の相違について答える者が多い。また自分の机や黒板、一輪車をはじめ運動具、理科室で見つけたものなど、園にはなかった物を語る。だが学習については「勉強を毎日する」というように、あまり細かくは語っていない。また行動様式として「小学校はチャイムや放送で集まりに気づくけど、幼稚園は先生が呼んでいた。幼稚園は鞆を用意

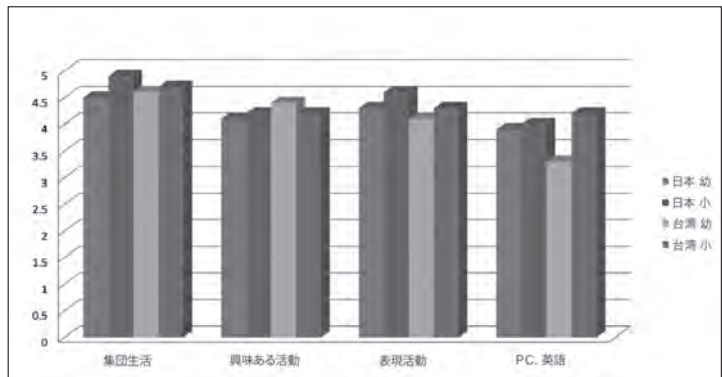
して歌を歌うけど、小学校は起立して、勉強を始める。遊ぶ時間が大休憩と昼休みしかない」など行動の手順に言及するが、その比率は高くはない。おそらく入学後2か月では、まず物理的差異を身体で感じ物の差異に気づく段階であり、活動ややりとりの詳細までは、子どもの中で表象され言語化できるにはいたっていないことがわかる。

また入学時の不安を尋ねた回答(次頁図参照)の日本・台湾の比較からは、台湾の方が全般にさまざまな心配が語られていることがわかる。これは学校についての語りや入学直後の活動の相違によるところが大きいのだろう。いずれの国でも教科学習としての宿題や文字への心配が挙げられている。相違点は、対人関係について、台湾では教師への心配、日本では友達にいじめられないかなど仲間関係への心配と内容的差異が見られ、生活面の心配でも台湾では遅刻、教師に叱られるなどの規律面、日本では給食や登下校などの生活面が挙げられた点である。教師と子どもの関係性の文化的相違の表れと言えよう。

保護者に就学準備内容を尋ねた調査でも文



■子どもの入学の不安 (野口他 2011)



■習得への期待 (野口他 2011)

化差は見られた。日本では学習、学習環境や用具の準備、生活リズムや生活習慣などの内容を語るのに対し、台湾ではもっぱら学校へ適応するための学習準備が語られる、台湾では小学校入学直後に発音符号を学習することになっており、移行期に保護者の学習に対す

期待の変化では、日本では基本的な生活習慣や集団生活、人間関係への期待の変化が最も大きく、造形や音楽、体育など表現活動への興味も高くなるのに対し、台湾では幼稚園での期待は低かった「パソコンなどの新しい技術や外国語の学習」が入学により高くなってい

る意識が日本よりもより具体的に高まっていることが示唆される。

一音節一文字対応でひらがなの習得が容易な日本と、難しい漢字習得を期待される台湾との表記体系の差異も保護者の期待に影響している。入学前後での保護者

る。文化が保護者の小学校イメージや期待の相違を形成していることがわかる。したがって今後保護者にどのような学校へのイメージや期待をもってもらうのが重要と考えられる。

子ども、保護者だけではなく、幼稚園と小学校の人事交流によって両文化を経験している教師たちも現在増えてきている。ある市で人事交流経験をされた先生方の経験の語りや調査回答等を収集分析させていただくと、【時間経験・見通し】【指導計画・準備】【教材・教具】【指導方法】【子どもへの言葉かけ・コミュニケーション】【子ども理解・見方】【遊びや学びの認識】【校内体制（同僚関係）】【記録法】【使用用語】【保護者との関係】【相手校の認識】【教師としての私とその感情】といったカテゴリーでの差異を抽出整理できた。幼から小へ、小から幼へと移動された両者の先生がまず最初に時間経験の相違を語られる。それだけ時間が適応との関係で大きな影響を及ぼしている。これらの先生は1年なり2年の移動の後また元の職場に戻られ、ご自身の経験を活かして指導案やカリキュラムの表記

の工夫をされたり、環境構成や活動方法に創意工夫を加えられており、制度だけではなく人の異文化経験が接続連携の大きな要となることがわかってきている。

●日本における幼小連携の 教育政策と実践

前半では個人の経験というミクロな視点からお話をしたが、後半は国や自治体での政策と実践というマクロな視点からお話をさせていただく。

日本での幼小連携は古くて新しい課題である。1920年代から諸変遷を経て、現在またホットなトピックとなっている。時代により連携接続に求める点は異なっている。現在は、1つには幼小中高の教育課程の一貫性による効果的な教育という教育の本質的な点にあり、もう1つには小一プログラム対応という直近の問題対応の面がある。

国レベルでの政策としては、幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校学習指導要

領の改定に伴い保幼小連携交流推進の記述が入り、小学校でのスタートカリキュラム編成や保育所保育要録の作成送付の義務づけ等がなされてきている。しかし国の調査によれば、幼小連携の取り組みは都道府県で23%、市町村で20%しか取り組まれていない現状がある。そこで「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方についての報告書」が2010年11月に作成された。当該報告書では、接続期の設定、教育委員会の役割が強調され、学びの芽生えから自覚的な学びへと幼児期から児童期の学びのあり方を捉え、そこで具体的に求められる内容を明記し、教育目標、教育課程、教育活動の関係構造が明確化されることで、幼小相互の関係者の理解を促すことを求めている。

自治体レベルでの接続連携の取り組みは、大きく4点に整理できる。第1点目は学区単位での保育所・幼稚園・小学校の連絡協議会の設定など連携のための組織づくり、2点目は市区町村で独自に0～8歳までの保育・教育課程の連続性を意識した地域カリキュラムの作成、3点目には、保育所・幼稚園・小学

校での保育士・教員間での保育参観、授業参観、幼小教員の人事交流等による幼小専門家の相互理解深化と具体的な取り組みの推進であり、4点目は、幼児・児童の交流活動の実施である。徳島県では、園と学校で共通に育成したい学びの過程を取り出し、思考力を刺激するポイントとして「比較して考える、関

1920年代 幼小の接続関係「接続級」のあり方として議論
＜制度＞
1960年代 幼年期の教育効果を高める試み
＜研究開発学校＞
1970年代 就学レイネスとしての幼児教育のあり方
＜個人の能力＞
1980年代 小学校生活科と幼児教育の連続性の検討
＜教科内容・方法＞
1990年代～2000年代 9・12年間の効果的な教育課程のために、多様な研究開発学校 地域の専門家の連携協力
＜教育課程、ケアと学びの共同体＞

■幼小接続の変遷

連させて考える、検討して考える」ことを挙げ、活動の中で気づく・感じる・考える・かわる・行動することを実施している。例えばある園では、栽培でも単子葉と双子葉植物に気づくように隣接して植えたり、同じ芋でもさまざまなものがあることを発見するプロセスを経験させ、「こうしたらこうなる」という推論の基礎体験を年間指導計画の中で繰り返しできるように保障して思考力の育成をはかっている。また東京都中央区の保育所・幼稚園・学校の連携では、たとえば「数・量・形の感覚を育てる」というように、特定の内容・分野に焦点を当て、環境構成や活動のあり方を振り返り、3歳から小学校低学年までの連続性を意識し、子どもが経験している数・量・形を整理した指導資料を作成することで経験の意味を可視化し、保育者や教師の自覚化を促したり、分類しやすい環境への工夫を試みたり、保育の指導案の工夫を保幼小教員の意見交換をもとに作成している。この協議のプロセスを通して、相互に専門家としての見識を深めていくことが重要と考えられる。

以上から、第1に経験の連続性、学習の連

続性を保障するには、子ども自身や保護者に見通しを与える機会が重要と言える。子どもだけではなく保護者に自分の頃の小学校と現在の小学校の指導が違っていることや何を準備しておけばよいかの見通しを明確に与えることで保護者の不安を低減し、また過度な期待を防ぐことができるだろう。第2に、子どもの見方や理解に関する専門的見識を一層深めるためにも教員の連携交流は有効である。これは、保育所や幼稚園を早期から小学校化するのではなく、発達に応じた適切な経験の保障こそが教育の質を高め、公平な教育機会を保障していくために重要といえる。また第3には、接続や連携の観点をもつことで、自明となっている保育環境や活動の意味を新たに発見し、より有効な保育環境や活動を準備できる。これらは国からトップダウンになされるのではなく、地域の知恵を生かして実施されていく多様性の中で花開くものと考えられる。

以上から、第1に経験の連続性、学習の連続性を保障するには、子ども自身や保護者に見通しを与える機会が重要と言える。子ども

だけではなく保護者に自分の頃の小学校と現在の小学校の指導が違っていることや何を準備しておけばよいかの見通しを明確に与えることで保護者の不安を軽減し、また過度な期待を防ぐことができるだろう。第2に、子どもの見方や理解に関する専門的見識を一層深めるためにも教員の連携交流は有効である。これは、保育所や幼稚園を早期から小学校化するのではなく、発達に応じた適切な経験の保障こそが教育の質を高め、公平な教育機会を保障していくために重要といえる。また第3には、接続や連携の観点をもつことで、自明となっている保育環境や活動の意味を新たに発見し、より有効な保育環境や活動を準備できる。これらは国からトップダウンになされるのではなく、地域の知恵を生かして実施されていく多様性の中で花開くものと考えられる。

「ひとりの仕事でありながら、
ひとりの仕事でない仕事」

「過去が咲いている今、
未来の蕾で一杯な今」

これは日本の陶芸家・河井寛次郎の言葉である。保幼小の連携接続により、すべての子どもたちに質の高い保育・教育を保障し、より一層大きな花を共に咲かせていきたい。

秋田喜代美



教育学博士。東京大学大学院教育学研究科教授。専門は教育心理学、保育学、授業研究。現在、日本保育学会会長、日本読書学会副会長。文部科学省中央教育審議会初等中等教育部会教育課程委員、厚生労働省児童保障審議会児童部会委員、(財)全国私立幼稚園研究機構理事などを務めている。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。日本教育心理学会城戸研究奨励賞、日本読書学会読書科学研究奨励賞、(財)発達科学研究奨励賞等を受賞。

主な著作に『読書の発達過程』(風間書房)『読書の発達心理学』(国土社)『子どもをはぐくむ授業づくり』(岩波書店)『授業研究と学習過程』(放送大学出版会)『知を育てる保育』『保育の心もち』『保育のおもむき』(いずれもひかりのくに)など、多数。



■徳島県の試み(佐々木 2010)

小一プロブレムと発達障害

榊原洋一

.....Sakakihara Yoichi

お茶の水女子大学大学院教授

●小一プロブレムとは

近年、学校関係者だけでなく一般の国民の間で小一プロブレムという言葉がよく使われるようになっていきます。小一プロブレムとは字のごとく、小学1年生の子どもの間によく見られる学校内での問題行動のことです。

幼稚園や保育園と異なり、小学校の教室では、一定の時間きちんと机に向かって座り、教師の指示に従って行動することが求められます。多くの小学1年生は最初は戸惑っても、一学期が終わるころには、小学校の教室のルールにも慣れ、なんとか小学生らしくなります。ところが、近年当然小学校の教室のルールに慣れてもよい時期になっても、そうしたルールに従った行動ができない小学1年生が増えてきたということです。こうした子どもたちは、教師の指示に従ったり、発言の順番を待ったり、あるいは机に向かって座っていることができないのです。

国立教育研究所では、こうした状態を「小一プロブレム」と名づけ、次のように定義しています。

子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない状態が一定期間継続し、学級担任による通常の手法では問題解決ができない状態に立ち入っている場合（「学級経営をめぐる問題の現状とその対応」国立教育研究所（平成12年））

●なぜ小一プロブレムが増えてきたのか

なぜ、こうした小一プロブレムが増えてきたのでしょうか。前述の国立教育研究所では小一プロブレムの原因について調査を行い、表①

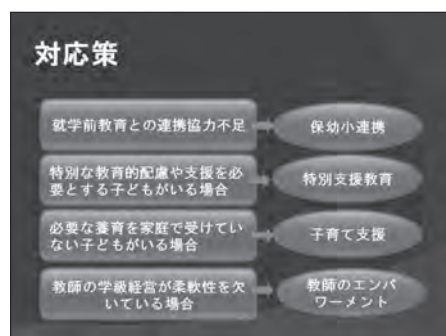
に見られるような複数の要因を明らかにしました。

表①から分かるように、小一プロブレムは決して生徒だけに原因があるわけではありません。しかし表①の下線部からもわかるように、集団行動が困難な生徒が少なからずいることも明らかです。

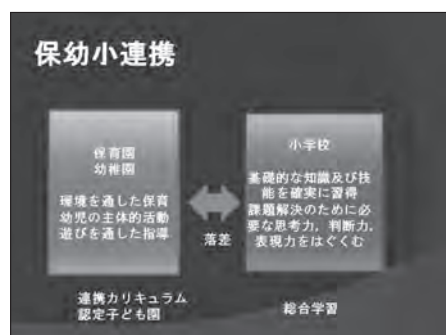
図①にあるように、小一プロブレムに対するさまざまな対策が立てられています。特に幼稚園、保育園から小学校に移行すると生活習慣

- ◎ 就学前教育との連携協力不足
- ◎ 特別な教育的配慮や支援を必要とする子どもがいる場合
- ◎ 必要な養育を家庭で受けていない子どもがいる場合
- ◎ 授業の内容と方法に不満を持つ子どもがいる場合
- ◎ いじめなどの問題行動への適切な対応が遅れた場合
- ◎ 校長のリーダーシップや校内の連携・協力が確立していない場合
- ◎ 教師の学級経営が柔軟性を欠いている場合
- ◎ 学校と家庭などとの対話が不十分で信頼関係が築けず、対応が遅れた場合
- ◎ 校内での研究や実践の成果が学校全体で生かされなかった場合
- ◎ 家庭のしつけや学校の対応に問題があった場合

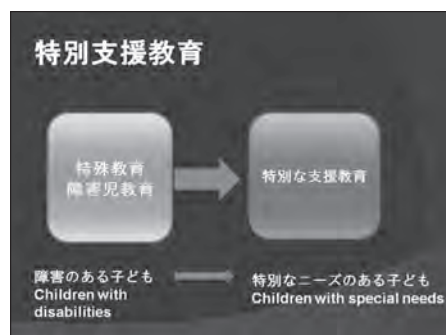
表① 学級がうまく機能しない状況10類型(国立教育研究所)平成12年



図①



図②



図③

を大きく変換しなければならないというハードルを低くするために、幼小あるいは保小連携を滑らかにする方法が広く検討されています。

図②参照。

しかし、社会性の発達に問題のある子どもたちの多くには、発達障害と呼ばれる生まれつきの行動特徴があることもわかっており、通常の幼小あるいは保小連携だけでは対応できないために、そうした子どもに対して特別な教育支援をする必要性があります。かつては知的障害や肢体不自由のある子どもに対して特殊教育と呼ばれる体制で対応してきましたが、後に述べるように発達障害の子どもは、必ずしも知的障害を伴わずまた数も多いことから、特別支援教育体制と呼ばれる新たな教育の仕組みが必要になっています——図③参照。

●発達障害とは

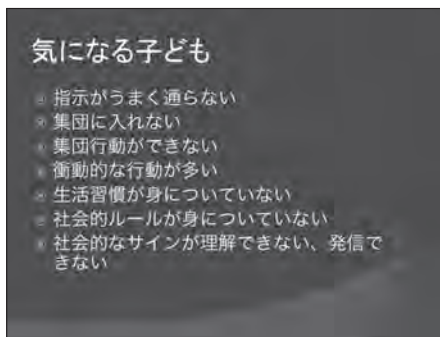
では発達障害とはどのようなものなのでしょうか。発達障害をもつ子どもたちの多くは、幼稚園、保育園あるいは小学校で一般に「気になる行動をとる子ども」です。「気になる行動」とはどんなものなのでしょうか。図④、⑤、⑥によく見られる「気になる行動」をまとめて示しました。気になる子どもには知的障害はないにもかかわらず、団体行動がうまくできず、教師の指示が入りにくく、また感情のコントロールが十分にできないという共通の特徴があります。他人の気持ちの理解や、社会的ルールの理解が不得手であるのも共通特徴です。

気になる子どものすべてが、発達障害をもつ子どもという訳ではあ

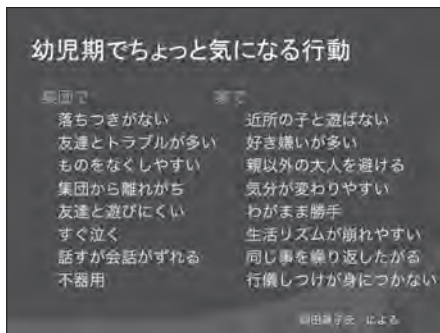
りませんが、気になる子どもの一部は発達障害が背景にあると考えられるのです。そうのように考えられる理由の1つが、図⑦、⑧に示した2003年の文部科学省の調査結果です。通常学級に在籍する子どもの6.3%という高率で発達障害の行動特徴が認められたのです。知的障害や肢体不自由の子どもは、子ども全体の2%前後と想定されていますので、かつての特殊教育の対象となる子どもの数倍以上の子どもが、特別支援教育の対象になると想定されるのです。

●注意欠陥多動性障害（ADHD）

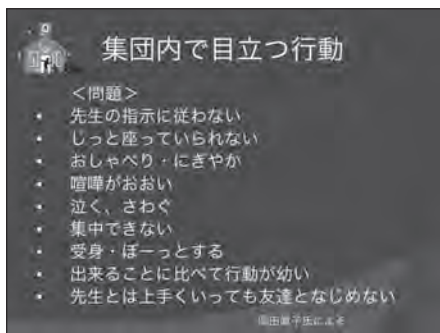
さて発達障害の中で最も割合が高いのが注意欠陥多動性障害（ADHD）です。前述の日本の文部科学省の調査ではこの注意欠陥多動性



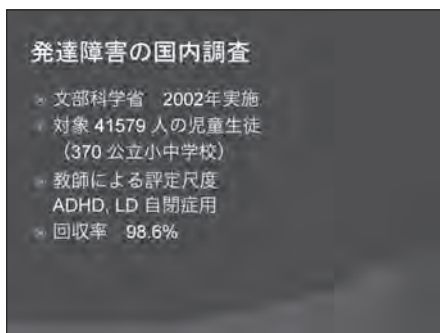
図④



図⑤



図⑥



図⑦

調査結果

Specific problems of the students 子どもの行動特徴	prevalence 有病率
Difficulties in reading, writing, and calculation (LD) 学習障害	4.5%
Inattention, or hyperactivity and impulsiveness (ADHD) 注意欠陥多動性障害	2.5%
Poor social relations or restricted, repetitive, and stereotyped patterns of behavior, interests, and activities (ASD) 自閉性障害	0.8%

図8

発達障害の共通の特徴

- ※ すべて生得的な障害である
- ※ 家族性がある（遺伝素因）
- ※ 精神遅滞（知的障害）は伴わない
- ※ 男児に多い
- ※ 集団生活の場（園、学校）で顕在化
- ※ 併存障害や二次障害が多い
- ※ 頻度が高い（～10%）
- ※ 脳機能画像で脳内過程の変化あり

図9

障害の子どもは子どもの全体の2.5%と推定されていますが、諸外国での調査ではもっと高い割合が報告されています。最近アメリカで行われた調査では8%と日本よりずっと高い割合が報告されています。男女比で4:5...1と男児に多いことも、他の発達障害と共通する特徴です。診断は、DSM・IVなどの診断基準に示されている行動特徴（じつと座ってられない、離席行動が多い、指示を最後まで聞かずに出しぬけに答えてしまう、ものをなくす、忘れやすい、順番が待てない、物事を順序立てて行えないなど）が一定の数以上あり、そのために家庭や教室でさまざまな支障をきたしていることを確認して行います。

こうした行動特徴のため、いつも叱られたり、いじめられたりするために、自尊心が育ちにくく、うつや非行（行為障害）などの二次障害をきたしやすいことが知られています。また、二次障害ではなく

最初から、読み書き計算ができない学習障害や、次項で紹介する広汎性発達障害などを併存することが多いことも特徴です。

注意欠陥多動性障害に対しては、集中しやすいように教室の環境を変えたり、叱らずに、適切な行動ができたときにほめる、行動療法的な対応が行われ効果が認められますが、メチルフェニデート、アトモキセチンなどの薬剤に行動を改善する効果があることが明らかになっており、薬物治療を行う子どもの数が増えています。

● 高機能自閉症・アスペルガー症候群と学習障害

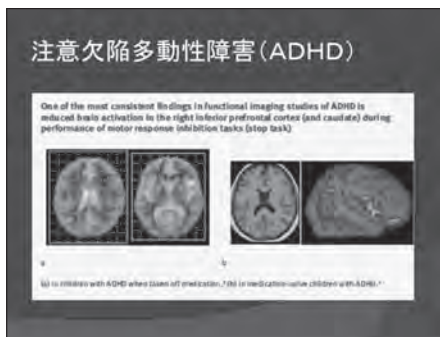
発達障害の1つである広汎性発達障害に含まれる、高機能自閉症、アスペルガー症候群は、前述の注意欠陥多動性障害と異なり、他人の表情や言葉の抑揚などから他人の気持ちを理解する能力が不十分にしか発達せず、そのために対人関係の障害が主症状となります。また言葉の発達の遅れや、皮肉や反語といった言語表現困難などの症状があります。そのために、集団の中で他人とうまく付き合っていくことが難しく一人で集団から浮き上がってしまいがちです。また、感覚過敏があり、特定の音や場面で不安になりパニックに陥ったりすることもあります。人よりも物に対する関心が深く、図鑑を丸暗記したり、時刻表やカレンダーなどに強い関心を示す人がいます。会話の場面でも、他人が何に関心があるのかわからず、自分の関心のあることばかり話題にしたりするため、なかなか友人ができません。

学習障害は、知的障害はないのに、文字の読み書きや文意を理解する

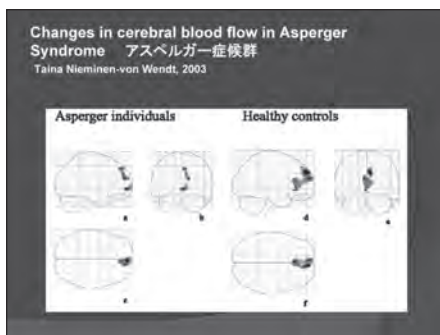
能力が十分に発達しない発達障害です。学習面での支障が強く、小学校に入ってから気づかれることが多いものです。学校での学業成績が低くなるために、はじめに勉強していいいと誤解されることがあります。

●発達障害の共通の特徴と脳科学

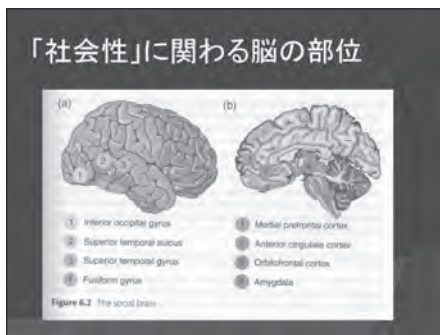
発達障害の共通の特徴を図⑨にまとめました。すべて、しつけや本人の心構えによるものではなく、生得的（生まれつき）に特定の脳機能が十分に発達しないことが原因です。さらに医学的には、特定の脳機能に関与する脳の活性化が不十分であることが示されています。図⑩、⑪、⑫はそうした脳内機能の低下を脳機能画像という方法で示したものです。注意欠陥多動性障害では前頭葉や尾状核、高機能



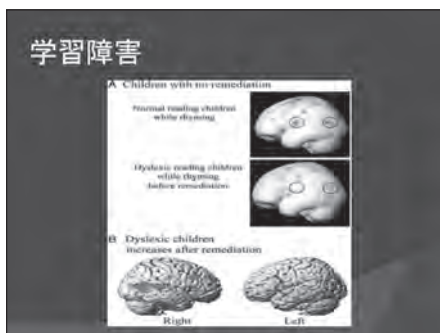
図⑩



図⑪



図⑫



図⑬

自閉症やアスペルガー症候群では、人の顔の表情を読み取る脳機能の中枢である側頭葉や他人の気持ちを理解する前頭葉などの活性が低下していることが示されています。学習障害では、読んだ文字の意味を理解するための脳の回路の活性の低下が認められています。

●学校・園での対応策

発達障害の子どもたちが決してまれではなく、子ども全体の6.3%もいることが明らかになり、こうした発達障害の行動特徴を有する子どもたちへの対応は、一部の保育士や教師だけが行えば済むものではなく、どんな教師でも、発達障害の知識と基本的な対応方法を知らなくてはならないことが社会的に広く認められるようになりました。最後

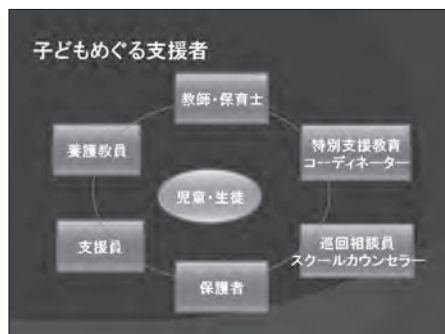


図16



図14

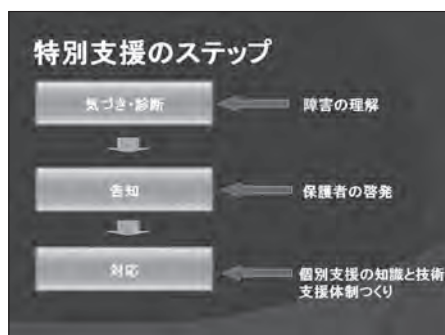


図17



図15

榎原洋一



医学博士。お茶の水女子大学大学院教授。日本子ども学会副理事長。専門は小児神経学、発達神経学特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。趣味は登山、音楽鑑賞。二男一女の父。

主な著書：『オムツをしたサル』（講談社）、『集中できない子どもたち』（小学館）、『多動性障害児』（講談社＋α新書）、『アスペルガー症候群と学習障害』（講談社＋α新書）、『ADHDの医学』（学研）、『はじめての育児百科』（小学館）、『Dr.サカキハラのADHDの医学』（学研）、『子どもの脳の発達 臨界期・敏感期』（講談社＋α新書）など。

に図14、15、16、17は、日本の特別支援教育体制の概念を図にまとめたものです。

すべての学校に、特別支援教育コーディネーターや、（特別支援教育の）校内委員会を設けることが法律で定められています。

学校内だけでなく、子どもの発達、心理、医学、福祉の専門家も発達障害の子どもを支援するチームの一員として参加していくことが必要です。

2 中国

中国における教育の 公平性と質の問題

第2章

【主催】 チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）、中華女子学院（中国・北京）
【日時】 2010年11月23日（火）、24日（水）
【場所】 中華女子学院（中国・北京）
【テーマ】 幼小接続―教育の公平性と質の関係の視点から―

第2章では、中国の現状を踏まえながら、幼小接続において、中国の独特の問題について触れています。都市部では、幼小接続の具体的なやり方について検討していますが、一方、農村部では、農民の子どもたち、または都市に出稼ぎに来た農民工の子どもたちの教育の機会均等という問題に直面しています。日中の幼小接続における相違点も明らかになりました。



幼小接続についての考察

朱 家雄

華東師範大学教授

.....Zhu Jiaxiong

◎90年代中国大陸で実施された研究

1990～94年、ユニセフと中国教育部（当時の国家教育委員会）によって「幼稚園（注）と小学校の連携についての研究」という共同研究プロジェクトが実施された。このプロジェクトでは、8つの省にわたり88か所の教育機関における2189名の子どもを対象に調査を行い、16の小学校・幼稚園においては5年連続で教育実験プログラムを実施した。当時の中国大陸では、毎年約2100～2500万人の幼児が小学校に入学していたが、そのうちおよそ6割の幼児が1年以上の幼児教育を受けていたことがわかった。

この研究プロジェクトの主旨は、「我が国の都市部と農村部において幼小連携における普遍的で規則的な問題を見出すと同時に、教育実験プログラムを通じて確実に効果的な教育指針を打ち出すことによって、教育行政部門に政策の策定の裏づけを提示し、教育機関がこの分

野での改善および保護者の教育観の刷新、教育方法の具現化に理論的な説明と具体的な助言を与えること」を期するものである。

当時の中国大陸では、幼児教育機関の多様性と入園（就学前クラス、原文「学前班」）するチャンスの格差によって、子どもが入園するまでに得る経験が大きく違ってくることになる。同時に、中国大陸の就学前教育と小学校教育が全く異なる2つの教育プロセスであり、この2つの教育機関での学習と生活態度に非常に大きな差が見られる。前者は遊びを中心とした教育であり、後者は授業を主とした教育で、なおかつ厳格な学習と時間システムによって管理される。このような差異の存在が客観的に幼小移行におけるギャップをもたらしている。明らかに、このギャップが大きければ大きいほど、子どもの不適応問題も大きいのである。

この研究は44の幼稚園の1127名の年長クラスの幼児と、4つの小学校の1127名の1年生を対象に家庭の基本属性、身体状況、読み書き能力、社会適応力について調査し、また現場での観察も行った。

結果、子どもの学習適応問題が主に子どもの能力に現れ、知識やスキルという面での問題がなかったことがわかった。

また、この研究では、読み書き能力、数学、社会適応力の3つに、有意な正の相関が見られ、子どもの社会適応力における問題はある程度、学習適応力に影響を及ぼすことが裏づけられた。従って、就学前の幼児教育と小学校移行との問題を解決するには、子どもの学習適応力を改善するのみならず、同時に社会適応力を改善していかなければならない。

研究結果は、子どもの学習適応力と社会適応力に影響を及ぼす諸要因の中で、子どもの自主性の影響が特に顕著であることを強調した。すなわち、子どもの勉強に対する自主性の有無が、彼らの入学準備と適応状況に大きくかわってくる。従って、子どもの自主性を育てていくことを重要視していく必要がある。

当研究の教育実験は、前述の調査研究の結果に基づき、就学前幼児教育と小学校への移行における2つのタスクを設定した。就学前教育では、入学するための準備教育をきちんと行うこと。その重点とは学習適応と社会適応の準備である——小学校では、入学後の適応教育を行い、児童が順調に小学校の生活に適応するよう、入学後の教育のスタートラインを幼児と小学生との重なる時期の段階まで引き下げることである。

実験のプロセスと結果の両方から以下のことがわかってきた。教師の役割とは、子どもの発達段階に従うことであり、教師の教育と管理の下で子どもが自主的に学習するよう導くことであり、単純な学業成

績志向から社会性の発達を重視することに転換し、知識を伝授すると同時に、特に能力を育てることを重んじるべきである。具体的なやり方としては、移行段階において、授業詰め込み方式から遊びを取り入れた授業に切り替え、クラブといった多様な学習スタイルをアレンジする——子どもが手と頭を併用して活動するように促し、動的活動と静的活動を組み合わせる——この移行期における家庭教育の重要な役割を強調する——など。

●90年代の研究が現在の幼稚園と小学校カリキュラム改革に与えた影響

この研究はユニセフと中国教育部との合同研究プロジェクトであり、教育政策の策定と実施のプロセスなどを通じて、教育機関の教育理念と教育実践に、特に、幼稚園（就学前クラスを含む）と小学校のカリキュラムの改革に影響を及ぼしている。90年代の半ばより、教育部により策定された一連の法規や綱要および政策が幼稚園と小学校のカリキュラムの改革にガイダンス的な役割を果たし、多くの分野において当研究の結論と一致していることがわかった。具体的には次の通りに示される。

(1)教育理念において、子どもの発達および子どもの主体的な活動に注目するよう求められる教師

中国大陸は前世紀の改革開放以来、小・中学校と幼稚園の教育改革

において「子どもの発達」という概念が強調され始め、「子どもの発達を根本とする」理念が政府教育管轄官庁により提唱されるようになり、教師への教育と教育実践などの措置を通じて、教師の認識と活動に直結するよう求められている。

例えば、教育部は1996年に発表された『幼兒園事業規定』の中で、次のようなことを明確に定めた。幼兒園の教育は「幼児の心身発達のメカニズムに従って、幼児の年齢にふさわしく、個人差を重視したものであり、子どもによって異なるアプローチで教育し、幼児の個性が健全に発達するよう導かなければならない」、幼兒園は、「遊びを基本的な活動とし、さまざまな活動を通じて教育を行うべきである」、「幼兒園の教育活動においては、目的と計画をもち、幼児が自主的に活動に活動するように誘導する、多方面からの教育プロセスが実施されなければならない」など定めている。10年にわたっての宣伝と教育を経て、政府の指針と主流の世論に耳を傾けてみると、幼兒園の年長クラスあるいは就学前クラスにおいては、幼児教育小学校化に反対であり、幼児の自主的な探索と学習の大切さが主張されている。

(2) 就学前カリキュラムと小学校低学年のプログラムに対しての改革

就学前のカリキュラムは国により一括に規定されることから、幼兒園が独自に決めるよう改革された。カリキュラムの内容は以前の国の規定により定められた「言語」「体育」「音楽」「美術」「一般常識」「算数」から、「言語」「科学」「社会」「芸術」「健康」などの5大領域へ変革され、領域間の相互融合と浸透が提唱された。小学校低学年のカリキュラム

では、「道徳と生活」を加え、学生の実生活経験を重視し、就学前カリキュラムの連携を図ることにした。

(3) 子どもの遊びを強調し、情緒、態度など社会適応力を強調

幼兒園と学前班（就学前クラス）で子どもの遊びを重視するのみならず、小学校のカリキュラムにも「道徳と生活」科の中に遊びの内容が加わり、低学年の児童たちに、幼兒園と同じ方法（遊びや活動を中心とした総合教育の方法）で教育を行うことが教師に求められている。授業中、教師は、子どもの社会的情緒や態度面での発達に注目すべきであり、そうすることで、子どもが小学校にうまく移行することができる。幼児の一生の発達にも良い影響を及ぼすことになる。



●別の角度から見た「幼稚園と小学校接続」

90年代に行った「幼稚園と小学校接続研究」の研究成果は、その時の幼児教育や小中学校教育改革を推し進める役割を果たした。それと同時に、教育理念上、当時学業成績一辺倒で、子どもの能力と社会的情緒能力が軽視されていた問題への批判として位置づけられ、教育実践の中で、幼小接続問題を解決する上でも一定の指導的な役割を果たした。

10年を経たいま、中国では社会文化、経済状況で大きな変化が起こり、社会的な関心事や解決すべき問題点も異なる。

10数年前には、中国大陸で改革開放政策が実現し始め、経済発展が急がれ、計画経済体制やそれに影響する各分野で改革意識やニーズが高まった。教育領域でも、西側の教育理論、実践が導入され、教育専門家は教育現状に不満を抱き、改革の必要性や熱意も非常に強烈なものがあつた。

この20年来、経済改革の大きな流れの中、中国政府は効率性や遅れている現実の打開に多くの関心を寄せる反面、社会構造の安定と社会関係の均衡を無視することがあつた。「一部分の人が先に豊かになれ」というスローガンを打ち出したのもその代表例の一つである。これと同じように、教育改革でも、政府は「質の高い幼稚園、モデル校」に力を注ぎ、それらの園を改革のモデルに仕立て上げた。そのような実績や、10数年前に行った「幼稚園と小学校の接続研究」を踏まえた展望としては、プロジェクト研究を通じて「どのようによりよく接続し

ていくか」という問題に注目するとともに、モデル幼稚園、モデル学校を建設し、すべての園、学校がそれを目指していくということである。

しかし、今日、中国大陸の経済改革はある程度発展し、社会的な経済格差、資源不平等の問題が政府や民衆に注目されるようになった。中国大陸では、就学前教育施設で1年保育を受けられない子どもが25%、3年保育を受けられない子どもは50%に達している。中国政府は、「調和のとれた社会」を目指しており、教育問題は最初に解決すべき問題である。すべての国民に教育権利を保障することが、「調和のとれた社会」の重要な指標となる。

10数年前のすべての人に教育を受ける機会が平等に与えられなかった時代においては、「一部の人だけ先に良質な教育を与え、彼らに先によい発展を遂げさせる」という考えは理解できる。しかしいま、フランスのとれた発展を考え、教育の不公平な現状を改善すべき時が来た。従って、幼稚園と小学校接続の問題でも、同じく「よりよくしていく」よりは「なぜやるのか」、「何をやるべきなのか」を考えるべきである。

筆者は、就学前教育を受ける機会がなかった、または少なかった子どもには、「遊び」よりも「学習適応力」と「社会適応力」を提供しなければいけないと考える。教師の質が高くなく、教師と子どもの比率が小さい教育資源が少ない教育機関では、子どもの生活経験を重視し、自主的な探検活動を推進するのが、幼小接続を解決するよい道とは思えない。

幼稚園と小学校の接続問題は、単独の研究の結論で政策、戦略を制定して、解決できる問題ではなく、たったひとつの優れたアイデアとやり方で解決できる単純な問題ではない。

●さまざまな要因が影響する

幼稚園と小学校の接続

一方、小学校への接続問題は、彼らの学習適応力と社会適応力だけを改善すれば、解決するような問題ではない。幼稚園と小学校接続に影響する要素は、人によって異なるし、時代によっても異なる。

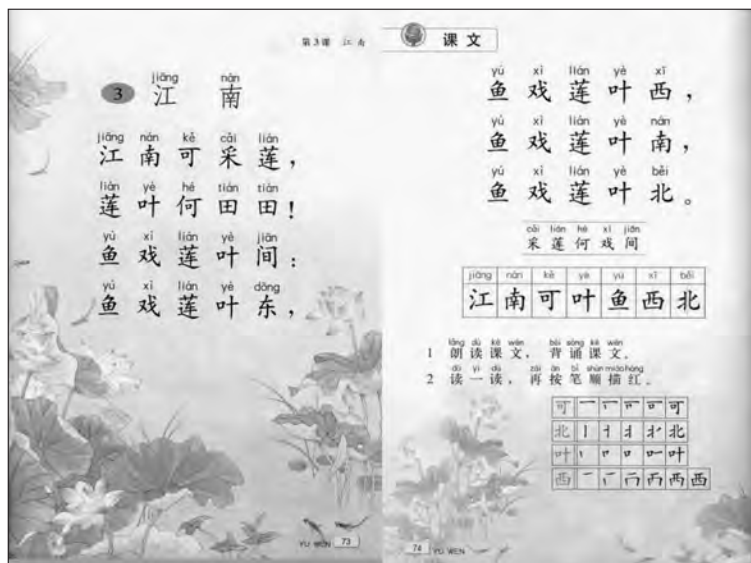
例えば、筆者はいくつかの省（日本では県に相当）の小学校低学年の教材、とくに国語教科書を分析したことがある。1学期また1年生の内容は非常に難しく、進むペースも速い。就学前に、このような状況に適応する準備をしておかなければ、小学校の学習に進む上では、壁にぶつかり、自信喪失になってしまう危険性がある。

また、小学校の教師の授業の進め方や、授業中の子どものかわり方も幼稚園と異なるし、学校の日常運営方法や、一日の流れが幼稚園と大きく異なることから、特に個性の強い子どもの中で挫折感を味わう子どもは少なくないだろう。

●結論

幼稚園と小学校の接続問題を解決することは、政策とかわる実務





問題である。このような問題を解決するには、「実効性」に基づいて判断・行動すべきであり、理念至上主義ではうまくいかない。現実に問題を解決するには、決められた方法があるわけではない。「時間、場所、条件に応じて、その都度柔軟に対応」していかなければならないし、成敗を検証する唯一の基準は実践である。

朱 家雄



華東師範大学就学前及び特殊教育学院教授、教育部人文社会科学重点研究基地—華東師範大学基礎教育改革及び発展研究所研究員、博士課程指導教師、終身教授、華東師範大学就学前研究所所長。

現在、中国就学前教育研究会（国家一級学会）副理事長、学術委員会副主任、環太平洋乳幼児教育学会（PECERA）中国大陸委員会主席の任にあり、国際的な就学前教育定期行物4誌の編集委員を務めている。

学術研究と教育の主な分野は、就学前教育の基本理論、幼児園カリキュラム等。これまでに主宰した各種のテーマ研究は多項目にわたり、発表した著作・翻訳・教材は数十種類、論文は百本余り、相前後して省・部レベル以上から多数の賞や、國務院の特別助成金を受けている。

注●中国では、幼稚園のことを「幼稚園」と言う。本文では、中国の幼稚園を指すときは、「幼稚園」と統一表記する。

義務教育の機会均等と入学準備 (注1)

馮 曉霞

北京師範大学教授

Feng Xiaoxia

目下、基礎教育、特に義務教育のバランスの取れた発展は、我が国の政府、国民および学者が広く注目する問題になっている。これが、教育の公平性を確保し、さらに社会の公平を促進する基礎である。研究者たちはしばしば、概念の意味、原則、実施方法および現在存在する不均衡な発展、原因などの角度から基礎教育のバランスの取れた発展問題を検討する傾向がある。これらの研究は意義が深く、学界の教育の公平性を促す情熱と努力を十分反映している。しかしながら、これらの研究には義務教育段階で学校の間に資源（設備、経費、教員）が均等に配置されさえすれば、義務教育におけるバランスのとれた発展の問題が基本的に解決できるという観点も仄めか

される。

義務教育のバランスの取れた発展は学齢期の子どもが平等に教育権を享受する基礎を作ったことは否認できないものの、数多くの国際研究によれば、異なる文化的背景をもつ子どももの入学準備における差異は、入学後の学習と発展に影響を及ぼし、公共財政の投入効果を減らすだけではなく、義務教育の実施によって教育上の平等を促進しようとする政府の期待を台無しにする。そのために、さまざまな措置を取って就学前教育のバランスのとれた発展を促進し、義務教育の基礎を築く国は少なくない。人々は、入学の準備が子ども自身の問題としてあるだけではなく、子どもと環境が互いに影響し合った結果であ

るとすでに認識しているからである。すなわち、「準備済みの家庭＋準備済みのコミュニティ＋準備済みのサービス＋準備済みの学校＝準備済みの子ども」との認識のもと、準備済みの子どもは、準備済みの家庭、コミュニティ、サービスと学校によって作られた準備済みのシステムから生まれることになる。(注2)

西側国家の幼児公共サービスが「慈善」から「福祉」、それから「教育」へ発展する道を歩んでいき、事業の主体も、「個人行為」から「民衆責任」へ移行する歴史を経験したのは、このような認識があったからかもしれない。「現在、ほとんどのヨーロッパ国家における早期教育への出資方法は公共財政であ

り、「アメリカは「就学前教育の普及が比較的遅い」と自認したが、^(注3)一連の措置から急速に他国を追いかけようように見える。例えば、西側の他の国と同じように、就学前の1年間（5歳の時）の教育を義務教育の範囲に定めた。率先して3〜4歳の貧困の子ども向けの早期補償教育計画「Head Start」を実施し、無料教育を徐々に全ての3〜4歳児までに普及させ、0〜5歳児の保護者の保育・教育能力向上を目的とする家庭教育法案を実施した。また、児童福祉と保育教育の関係法を整えることなどによって、アメリカの就学前教育は徐々に公共サービスの体系に入れられ、政府が責任を負うようになった。就学前教育に関する法律がこのことを明らかに示している。これらの法律法規は政府の責任において明確に規定された。例えば、有名な「Head Start」計画は、国会が同意し、大統領が許可した「経済機会法」の重要な内容の1つであり、連邦政府の財政予算の範囲に入り、2008年の予算はすでに73・5億ドルに達し、当計画が始まった1965年より金額が76倍も増えた。また、1979年に採

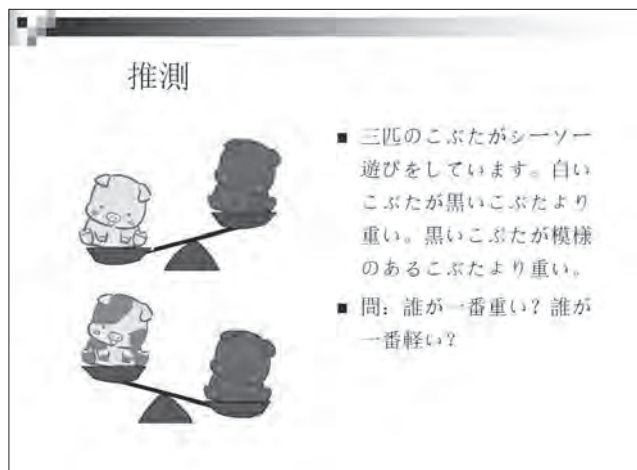
択された「児童保育法」、1990年の「児童早期教育法」、「児童保育と発展固定資金支給法」などは、連邦政府と州政府が資金支給における役割を定め、さらには連邦政府が毎年州政府への資金支給額まで明確に規定した。さらに、1988年と1990年2回にわたって「社会保障法」を修正した際も、低収入家庭に保育園入園手当てを支給する条項を加えた。連邦政府が各地に割り当てた社会サービスを向上させるための経費の中に、約1/5が早期保育と教育に当てられる。

以上のような、弱者層向けの早期補助教育政策、義務教育の早期化政策、両親の早期養育と教育能力を向上させるための措置などを行う目的の一つは、子どもたち（特に不利な社会的状況に置かれた子どもたち）をほかの子どもと同じスタートラインに立たせるためである。^(注4・5)1994年アメリカが定めた「アメリカ2000年教育目標法」には、「2000年までに、すべてのアメリカの幼児が入学準備を整える」という目標がトップにされ、これは事実上幼児教育の均衡的發展を国家の任務の1つにしたわけである。

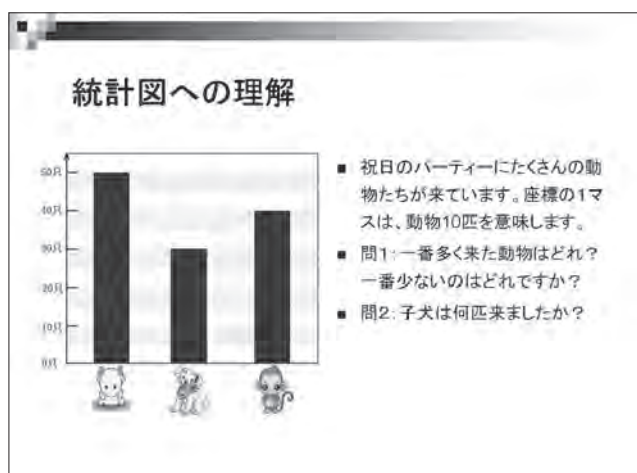
我が国は早期教育を重視する伝統があり、春秋時代にすでに「正本慎始」（胎教を重視）、「早諭教」（早期からの教育）の思想が現れた。ここ数年来、早期発達の科学研究成果の普及と一人っ子政策の実施にともない、親が子ども教育問題をこれまでにないほど一層重要視している。しかし、子どもたちは入学時にすでに入学の準備ができていと言えらるうか。就学前教育が義務教育のバランスのとれた発展のための良い基礎を築いているだろうか。我々が実施した調査に基づいて言えば、この答えは「否」である。

我々は、北京市にある、出身者別で3種類の6つの小学校を調査対象にし、学校毎に1年生の1クラスを抽出し、さらに25名をランダムに抽出し、計150人を対象に調査を行った。

この3種類の学校の新生はそれぞれ主に次のように分けられる。(A)農家や出稼ぎ労働者の子ども (B)工場労働者や一般市民の子ども (C)企業経営者、管理職と知識人の子ども。調査期間は入学2週間以内とした。調査内容は、数学、言語、社会性と学習姿勢の4つ



図①



図②

の領域が含まれ、主な調査方法は個別テストと観察であった。

150名の子どものテスト成績を従属変数とし、学校の群分けを独立変数とし、1要因の分散分析を行った。その結果、3種類の学校における新入生の入学準備状況はいろいろな面で大きく異なることがわかった。

数学に関するテストは5つの部分（数と計算、量、時間と空間、関係とモデル、統計）からなり、合計21項目であった。そのうち、20までの足し算・引き算および計算方略、数字の読み書き、概算の4項目において、3種類の新入生の間に有意な差が見られなかったが、残りの17項目においては、全対の間また

はA群とC群の間に、有意差が見られた。

言語に関するテストは6つの側面（発音、語彙、文法、言語操作能力、前期読み書き）で13項目だった。そのうち、方向知覚、図形観察、ペンをコントロールする動作の3つにおいて、3群の新入生の間に有意な差がなかった。ほかの10項目においては、3群の全対に、またはA群とC群の間に有意な差が見られた。

学習姿勢の面では、学習能動性、目標意識、集中力、探究心、想像と創造力の5つの面において、A群と、B、C群との間に有意な差があった。一方、計画性、持続性、独立性の3つの面における差の程度は活動領域によって違っていた。計画性と独立性は数学活動において差があった。その一方、持続力は言語活動の中で有意な差が見られた。

社会性は自己受容、人とのコミュニケーション、社会ルールの3つを含む。自己受入れの総得点において、3群の間に有意な差が見られた。そのうち、認知受容という項目において、A群とC群の間に有意な差があった。人との付き合いの中の「他者理解」とい

う項目では、A群とC群の間の差が有意であった。付き合い能力では、人とのコミュニケーションの開始と維持方略のタイプ、頻度については、3群の間に有意な差はなかったが、方略の有効性・妥当性については、A群とB、C群との間に有意な差が見られた。また、葛藤解決の妥当性において、C群はA、B群とは有意差があった。社会ルールのうち、独立意識の項目において、A群とC群の間に有意な差があった。規則意識において、3群の全対の間に、いずれも有意な差が見られた。

多重比較の結果、有意差が見られた項目では、社会性の中の自律意識、人とのコミュニケーションを維持する方略の妥当性と有効性という2つの項目では、A群は優勢を示した。数学の「測量」という項目においてB群が優勢を占めた。そのほかのすべての項目においては、C群の得点が最も良く、A群が最も悪かった。

アメリカ児童早期発達総合科学委員会2000年のある研究報告では、次のように指摘した。「入学は一つの重要な転換点である。この時点での幼児の知識と能力における

内容	MS	F	Sig.
積極性	1.271	6.136	.003
目標意識	2.359	8.116	.000
集中度	1.544	4.912	.009
独立性	.288	1.203	.303
想像力と創造力	5.807	5.922	.003
挫折に対する対抗力	.312	.655	.521
好奇心	3.618	5.810	.004
根性	.859	1.740	.179
P<0.05			

図③

		Sum of Squares	df	Mean Square	F
前期 (n=144)	態度	20.430	2	10.215	11.751***
	習慣	41.391	2	20.696	28.719***
	能力	71.303	2	35.652	70.113***
	成績	63.530	2	31.765	58.010***
後期 (n=138)	態度	21.536	2	10.768	12.590***
	習慣	43.715	2	21.858	31.632***
	能力	55.810	2	27.905	46.400***
	成績	57.214	2	28.607	48.912***

図④

個人差が彼らの学習と遂行能力の長期的プロセスを予期させる。それぞれの子どもが受ける早期教育の機会において大きな格差が見られたことは、我々が深く懸念する理由の一つである」。私たちの研究結果も同様に不安と懸念を感じさせられるものであった。

9年制義務教育を充実させ、品質を高め、

均等な発展を促進することが現在教育政策の制定者にとって最も大事なことであるかもしれない。しかしながら、家庭と社会の背景などの原因で準備ができないまま入学してしまった大勢の新入生を前にしながら、義務教育を強化し、その質を高めることは大きな障害物にぶつかったようなものではないだろう

か。もし入学時において新入生にすでにこのように大きな格差があれば、義務教育の均等発展の目標がどうやって実現できるのだろうか。

アメリカ経済発展委員会が1985年に提出した報告に、「もし国家が子どもに早期教育をするチャンス逃がしてしまうとしたら、それ以降の教育投資は望まれる効果をあげることとはできない」「もしアメリカの子どもたちが良質な早期教育を受けられなければ、アメリカは将来グローバル競争で勝ち抜くことはできない」と書かれている。以上から欧米の国が就学前教育の政策を改定する根本的な出発点は国家利益であり、「次世代をスタートラインで負けさせない」ためという理由がわかった。

国際社会の就学前教育の発展の流れと政策の動きを見て、我々は真

剣に反省すべきではなからうか。就学前教育は単なる就学前教育で、子どもとその家庭のみにかかわる話であらうか、と自分自身に問うべきではなからうか。我が国の次世代はスタートラインで負けて良いのであろうか。

注1●該当内容は北京市教育科学企画十五の重要課題「北京市農村部における就学前の一年間を義務教育化する実行可能性をめぐる研究」の研究結果の一部である。課題の許可番号はACA06055である。研究グループの主要メンバーは蒼翠、李海霞、成麗媛、王寶華、肖樹娟、張啓芬、陳敏倩である。

注2●沈曉燕等、「異なる声、同じ心」、『就学前教育』。2006.12。

注3●同注2、17～18ページ。

注4●馮曉霞、幼児教育の民主化のために、『学前教育研究』2002年第1期。

注5●馮曉霞、蔡迎旗、嚴冷、世界学前教育發展の趨勢と国家政策、『学前教育研究』2007年第5期。

馮 曉霞



北京師範大学教授、大学院博士後期課程教授、中国就学前教育研究会理事長、雑誌『就学前教育研究』の編集主幹。主な担当科目は就学前児童心理学、家庭教育、幼稚園カリキュラムなど。

これまでに担当した課題は全国教育科学計画「第九回五ヶ年間計画」、「第十回五ヶ年間計画」の重要課題である「中国幼稚園カリキュラム政策研究」、「中国21世紀就学前教育管理システムと政策研究」および北京市「第九回五ヶ年間計画」、「第十回五ヶ年間計画」「第十一回五ヶ年間計画」の重点課題である「幼児主体性発達と教育」、「幼児主体性発達を促進する課題と教授研究」、「北京市農村における就学前一年教育義務化の実行性研究」など。

都市は、流動児童に基本的な就学前教育を提供できるのか？

— 平民教育は教育の公平性を実現するための選択肢である

張 燕

北京師範大学教授

.....Zhang Yan

●都市人口の急速な増加に伴う流動児童の就学前教育における社会問題

都市化の進展に伴い、ますます多くの農村出身者「農民工」が労働者として都市に流れ込み、国の経済発展のための大きな建設労働力となっている。最新のデータによれば、2009年には我が国の流動人口は2億1100万人に達した。流動人口（注）は北京や省都といった大中都市、および珠江デルタ、長江デルタといった南東沿海地区等に多く集中している。

北京市の政治協商委員の最近の調査によれば、昨年未までに、北京市の実際の常住人口は1972万人に達し、その中で、半年以上居住する流動人口は726万人で1/3強を占めている。北京で義務教育を受けている外来の労働者の子女は2000年の9万人あまりから、2009年には41万8千人へと急速に増加し、学生総数の40%を占め

た。その中で、66.9%が公立の小、中、高校に就学している[1]。就学前段階の流入児童の人数は現在正確な数字は得られていないが、家族での移動の上昇傾向や、直近3年間に北京市で生まれた新生児のうち、非戸籍人口が51%を占めているという状況から、流入した就学前児童の数はすでに有戸籍児童数を上回り、50万人という多数に達していると推測される。

このように大量の人々の託児サービスに対するニーズはどのような状況にあるのか。彼らの



就学前教育はどのような状況を呈しているのか。都市が発展するためには、外から来た児童に対する就学前教育という重大な社会問題を直視し、それにふさわしい政策を実行し、適切な方法を採用して解決を図り、社会の公平化と教育の公平化を推し進める必要がある。

●既存体制の周辺地域が 平民教育の実践探求のフィールド

経済体制転換という社会的背景、および「農民工」が子女を伴って流入し、入学するという現実的ニーズは、下から上への平民教育の発生を促した。一方で、民間による「農民工」子女を対象とした各種の非正規託児機構が大量に出現し、低コスト経営方式で、柔軟で便利な託児サービスを提供し、それによって自発的な低所得層市場が形成されている。その一方で、市民社会の萌芽とその発展に伴って、流動児童の就学前教育の当面のニーズに直面して第三の勢力が出現した。

目下のところ、低所得層市場に対応したいわゆる正式に登録されていない幼児園（中国語では「山寨園」〈さんさいえん〉という。以下そのまま中国語で表記する）は就学前教育の半分を占めるようになっていいる。北京市を例にとれば、費用が安く、正式な登録がなされていない山寨園は1298カ所に達しており、北京市の登録幼児園1266カ所をすでに上回る数である（注2）。北京師範大学の最近のある調査では、山寨園に関するさらに詳しい情報を提示している[2]。すなわち、都市における流動人口の多くは都市と農村が境をなす区域

に居住している。例えば北京市など大都市の一部の都市周辺の地域では外来人口と従来からの住民との割合が10・1、あるいはさらに高くなっている。このような地域は多くが農村から非農村に転換した「都市中の村」であり、公共サービス施設は全然なく、国公立の正規幼児園は存在しない。一方で、託児に対するニーズは客観的に存在している。そこでさまざまな形式の無認可幼児園が自発的に出現し、その受け入れ児童の95%は外来の農民工の就学前子女であり、近くに入園できるといふ便宜を提供し、無視できない教育的勢力を形成している。

山寨園はその地域におけるニーズと現実の条件を満たす形で運営さ



れており、その業態全体での費用は通常1か月2000元から4000元（給食費を含む）の間の水準にあり、基本的に農民工群の受容能力に合致している。低コスト経営では、物質的条件は一般に比較的貧弱で、教師の力量も薄弱である。しかしながら、簡便な山寨園は区域周辺の環境と協調し、適応しているのである。目下、都市と農村の結合した地区は多くが「都市中の村」であり、発展の盲点あるいは発展計画待ちで不確定要素のある区域に属している。そこに集中して居住する大量の農民工群の子女の入園ニーズは待ったが許されない。まさにこのような背景から、山寨園が出現し、農民工の子女に最低限の就学前教育を提供し、その地の人々の託児に対する基本的なニーズを満たしている。調査によって、山寨園の経営主体自身も往々にして外来人口の一員であるか、あるいは高等教育を受けたフリーター「蟻族」であることがわかった。例えばある経営主体者は、中華女子学院の出身者であったり、あるいは雲南師範大の卒業生である。彼らが「家託式」の幼児園を自主的に創業し、低価格で高サービスというポジションに自らの位置を定めている。

できる限り、保護者たちの託児サービスへのニーズを満足させることが山寨園の最も突出した特色である。例えば一日の生活計画やカリキュラムの特色においても保護者のニーズを重視している。農民工の保護者たちは自営の販売業、清掃業、建築設備業等に従事しており、その労働時間の多様性に対処するため、開園時間は通常、月曜日から土曜日までで、日曜日も開園するところもある。平常は早朝6時半から受け入れて夜間の退園で、延長サービスは通常、別料金を徴収しな



い。これらは休業規則の厳格な正規の幼児園とは異なっている。規模が比較的小さく、システムが柔軟で、かつ地域に則していることにより、山寨園は発展過程に起こる問題にタイムリーに対応することができ、サービス内容形式を随時に調整することができ、適応性の高さと柔軟で便宜性の高いサービスにより、保護者の満足を勝ち得ている。

山寨園は、経営主体という点からみると、民間の自発的な創業によるものであり、「自弁園」、「民弁園」に属している。業態形式から見ると、小規模な年齢混合型の家庭型託児所と、年齢別に大体3クラスに分かれている中規模幼児園とがあり、その中には歴史も比較的長

く、評判もよい園も少なからずあり、またチェーン経営の園もある。全体的に見て、山寨園の規模は比較的小さく、地域分布や入園生の対象から見れば、山寨幼児園は都市周辺あるいは都市と農村が交錯する地域に多く分布しており、主にそこに集まって居住している外来農民工の子女を募集している。このため、「労働者子弟幼児園」、「農民工幼児園」とも呼ばれている。山寨園という呼び方はそれが周縁の位置にあることを示している。すなわち既存の教育体制の外にある園経営の類型に属しているということである。国からの認可を得ていない点から、メディアは往々にして「非法幼児園」あるいは「ブラック園」と呼んでいる。

低所得層に位置する流動人口すなわち農民工の就学前教育に対するニーズに対して、さらに「第三の道」^(注3)が現われている。すなわち、民間経営による公益性就学前教育組織である。市民社会が叫ばれる今日にあって、民間公益組織の方式で弱者集団に非正規の就学前教育を提供することは、理論においても実践においてもよい実証が得られている。目下のところ関連政策や発展環境が決して寛容なものではないのにもかかわらず、政府や市場の外の第三部門が社会の公平維持の面で發揮する役割は、誰の目にも明らかである。例えば四環遊戯グループがある。北京の1つの自由市場で偶発的に誕生した四環遊戯グループ、それは子どもたちの遊びの空間であり保護者の育児相互支援の場所であるばかりでなく、ボランティア学生たちの学びの実践、教育研究の基地ともなっており、教育の質が非常に高く、正規幼児園に負け

ないことは実証されている」[3]。四環遊戯グループは非営利の託児施設として、6年の実践を経て、流入児童に対して文化的に適合する就学前教育の一筋の道を指し示している[4]。現在、既存体制内の幼児園とは異なるこの種の非正規教育モデルが、流動人口が密集して居住する石景山劉娘府社区や海淀肖家河などの地区でプロジェクト化されて推進されている。これが就学前の流動児童にさらに多くの選択肢を提供し、低所得層の人たちにさらに多くの益をもたらしていることは疑いのないところである。

草の根階層が自身のニーズを満足させることによって形成した、幼児教育の低所得層と第三のパワー、この種の低層からの互助的自助行動は、その誕生そのものが民間のパワーと知恵を表すものである。平民教育は一般大衆の手で、ということが基本的な社会福利を提供して流動人口、特に農民工の託児ニーズを解決し、流入児童に入ることのできる園を与え、彼らに就学前教育という最も基本的な権利を保障したのである。このように、平民教育は一般大衆の手で、ということが流動児童に就学前教育を保障する現実的で有効な道筋になったことがわかる。

●不適切なマネジメントをもたらす 平民教育の困難

山寨園がニーズによって誕生し、低所得層の人々の託幼サービス問題を解決した。だが、このタイプの平民教育はいまだ認可されず、差



別や制限にあったり、甚だしきは閉鎖されることもある。グレーゾーに置かれているということで、従事者は職業的な安定感をもてないでいる。四環遊戯グループといった草の根型公益組織も同様に、抑圧や登録難などという、発展上の困難に直面している。明らかなことであるが、長い間の、都市と農村という二元経済体制と現実上の巨大な格差によって、主流社会特に都市の管理階層は低所得層の人々の実情に対して今も無知なままである。自主的な就業や創業による、よりよい生活を求めるための努力に対しても、知るすべも理解するすべもたないのである。主流社会あるいは都市戸籍人口の立場に立っていい

は、当事者たちからは歓迎されている平民教育を、まるで理解できないようである。「昼は夜の暗さがわからない」と同じである[5]。

しかし、山寨園が厳しいバッシングに遭っていると頻繁に報道される中で、農民工である保護者の山寨園に対するニーズが依然旺盛であることは、当局の立場と大きなコントラストを見せている。この状況は、ニーズこそが市場であり、民間からのパワーには強い生命力があるということを表している。就学前教育の資源とその供給は社会の中に広範に存在し、市場、民間はニーズに素早く反応することができ、政府ができないこと、政府にはやり通せないことが彼らにはできるのである。社会の中には巨大な積極性と創造性がひそんでいる。当局に無視し蔑視されている、このタイプの民間自助行動[6]が、流入する児童に最低限の就学前教育を提供しているのである。

山寨園についての矛盾は次の点に集結している。厳しくバッシングするものが強調するのは、園が基準に達することであり、一方支持者たちが関心を注ぐのは、現実条件下で子どもたちに通うべき園があるということである。目標、出発点の違いは、立場、価値観の差異を表している。前者はイメージと政治的功績に多く着目し、事故が起きないことを強調する。それに対して後者は低所得層の人々自身に立脚し、問題の解決に重きを置いている。「いったん学校に最も関心を注げば、子どもは重視されなくなってしまう」[7]。実は、行動の主体すなわち当事者自身の声や選択にこそ、

さらに関心を注ぐ価値があるのである。

市場経済のもとでは、政府は一切を請け負う全能政府ではもはやなくなっており、民間の力の勃興が社会発展の希望を予見させている。政府は山葵園の存在価値を認識すべきであり、その名を正しいものにするために、自然の勢いに従い、正しい道に導いてその役割を発揮させ、就学前教育の開設、経営問題で、政府と市場および民間の関係の調整に関心を注ぐべきである。そうでなければ、固有の決まりきった見方と消極的なやり方に固執し、「取り締まれども徹底せず」「禁止すれどもやまず」という困った局面だけでなく、社会の矛盾衝突をさらに激化させ対立をもたらすかもしれない。

●平民教育の発展と教育の公平性

改革開放後30年間で、外来流動人口、特に農民工は都市建設に突出した貢献をしてきた。都市は彼らの身内である子女に基本的な就学前教育を受けさせることができるのだろうか。実際には、平民教育の実践が清新な風潮をもたらし、目下の中国の教育改革と教育公平の実現、および昨今の教育の特権化・功利化の傾向をいかに変えるかということに対し、啓発的な意義をもっているのである。

1、既存慣習と制度に挑戦し、平民教育を発展させるために新しい政策を

長年、政治体制とイデオロギーの影響を受け、官と民、公と私が対

立の両極端であった。国公立の政府経営だけがよいもので、民間の私営のものは利に走る邪悪なものとされてきた。この慣習的思考のもとで、行政は当然のように山葵園を「厳しくたたく」よう誘導してきた[8]。「教育的であることが就学前教育の本質的属性である」——教育的ということを過度に強調し、その基本的な託幼サービスの役割を軽視してきたという認識上の誤りによって、正規幼児園をよりどころとして画一的、標準的であることを強調し、体制外の各種山葵園を徹底的に排斥し押さえつけることにつながっていたのである。それに加えて、実践中のいわゆる優良教育の追求がさらに近年の教育功利化傾向を激化させてきた。「最も豪華な学校あるいは幼児園が中国にある」という現象は偶然のものではない。「幼児教育の社会化」は経済体制転換の新情勢に適応するものである。平民教育は発展の前途を代表するものであり、同時に「小さな政府、大きな社会」の改革方向に符合するものである。体制改革に深く分け入り政策刷新を進めるには、イデオロギーおよび就学前教育機能に対する認識の誤りを突破することが必須である。

2、財政の分配制度改革により、平民教育に教育資源をより多く傾注

山葵園の経営環境は確かに貧弱であり、狭小さ等の問題が存在し、個別には安全性の問題が潜んでいる。保護者の納付金が唯一の収入源であることが、山葵園に低コスト経営を強いている。山葵園の存在が都市周縁の社会的低層に位置する農民工に最低限度の託幼サービスを受けさせることを可能にしており、彼らが幼児教育の社会的責任を担

い、政府はといえば、その最終的な受益者なのである。我が国の都市建設と社会発展が一貫して農村、農民の犠牲を代価としてきたこと、30年の改革においても社会的低層に位置する人々が最大の犠牲を強いられる一方で改革の成果を受けることは少なかったことを認めるべきであり、当然、彼らに報いる時期に来ていると認めるべきである。日増しに増大する社会の二極分化を縮小させることは政府以外に転嫁することのできない責任であり、財政資源の分配においては、弱者児童を対象にした平民教育により多く傾斜すべきである。負債の補償は流入する児童一人一人に対し教育券を配布することから始めてもよい[9]。幼児教育の発展には、その発生の背景、条件を考慮することが必要であり、どのような状況にも適合する普遍的な模式は存在しない。違いを無視した教育は、教育の公平が内包するものに符合するものではない。それについて言えば、ニーズに導かれた多様化した就学前教育の供給体系を構築することが今、実行されなければならない。

3、都市を建設者のふるさとに回帰させ、平民教育を積極的に支援し、適切に規範化

政府は山寨園の価値を認識し、肯定することを前提に、管理戦略を調整すべきである——取締りからサービスと支援へ転換すべきである。例えば経費、教師の養成面で支援を行い、同時に相応のサービスを提供する。その後に適切な規範化を図る。それには、実情に基づいた参入基準および差異化された、あるいは柔軟な評価基準等を構築すること、一般大衆の学校経営を奨励する寛容な政策や制度環境を形成

すること、非正規機構のさらに健全な発展を支援することが含まれる。そして最終的には流入する就学前児童が真に受益できるようにすることである。

「より良い都市、より良い生活」が今年の万博のテーマであった。流入する農民工および一緒に流入した児童は都市の新しい市民である。だが現実には、これら低層の一般大衆は時に忘れられているのである。都市が「建設者のふるさと」に回帰できるかどうか、農民工とその子女が尊厳をもって幸福な生活を送れるか否か——は社会全体が直面する重大で現実的な課題である。教育の公平を勝ち得る過程のなかで、民間および当事者を含む低層の一般大衆がすでに行動を起こし始めている。この努力に対し、政府はどうあるべきだろうか？

注1 ●《中国流動人口発展報告2010》のデータより。

注2 ●政治協商委員調査…北京山寨幼稚園の数が正規園の数を越えた。http://news.wuhan.net.cn.

新華ネット、2009.07.29

注3 ●「農民工子女教育の第三の道」は2009年7月6日、南都公益基金會副理事長兼事務局長の徐永光が21世紀教育研究院で行われた「新民教育論壇」で提起したものである。その主旨は公営と営利目的の私立教育以外に、公益学校という発展の道もあることを示すことにある。南都公益基金會自身が、流入する児童向けに創設された、公益性のある「新公民学校」を支えている。

■参考文献

- [1] 『新京報』…2020年北京の常住人口は2500万人に達する見込みである。
http://www.sina.com.cn 2010.7
- [2] 張燕、李相禹「山寨園と農民工子女の就学前教育——北京市の都市と農村の交錯する場所に位置する地域に対する調査と考察」『学前教育研究』2010(10)
- [3] 『新京報』…就学前教育の「ボトルネック」を突破するには教育の刷新が必要。2010年7月31日

- [4] 張燕、「四環遊戲グループの物語——農民工子女の非正規就学前教育探究に対して」北京師範大学出版社、2009年1月
- [5] 「民工子弟幼兒園 昼は夜の暗さがわからない」嘉興オンライン新聞ネット、2010年3月5日
- [6] 韓嘉玲、「北京市流動兒童義務教育狀況調查報告」『青年研究』2001(8)
- [7] クリシユナムルティ〈生涯学習——我々はどうような学校を必要としているか〉。群言出版社、2004.11
- [8]・[9] 張燕、経済体制転換のなかの我が国の就学前教育発展が直面する問題と挑戦[J]、『学前教育研究』2009(10)

張 燕



北京師範大学教授、修士課程教授。北京師範大学教育学科卒。現在、北京就学前教育研究会常務理事、北京市幼兒教師スタジオ、NPO「四環遊戲グループ」の責任者。

専門は就学前教育原理、就学前教育体制と管理、幼兒教師専攻発展、居住地域非正規幼兒教育と流動兒童教育問題。近年の主な著書は『幼稚園管理』（人民教育出版社 2008年）、『学前教育管理学』（北京師範大学出版社 2009年）、『幼稚園管理実例と分析』（北京師範大学出版社 2002年）、『反省の中での成長』（北京師範大学出版社 2007年）、『四環遊戲グループの物語——流動兒童の非正規就学前教育の模索』（北京師範大学 2009年）など。

流動児童の親の子どもに対する期待と教育の現状調査

―北京市のある村を例に（注1）

王 練

中華女子学院副教授

.....Wang Lian

●問題提起

流動児童の教育の公平性は、いま特に注目を集めている社会問題である。ここ10年来、我が国の流動人口の「一家を挙げての大移動」に伴い、大勢の就学前の子どもが親とともに農村や、経済の発展しない地域から都市へ移り住んだり、転入先の都市で生まれたりしている。これらの子どもは戸籍、家庭の経済状況、居住環境などの制限により、正規の教育から外れ、不利な教育環境に置かれている。本研究は、北京市朝陽区の城郷結合部（都市と農村の合流地域のある村を調査対象地とし、現地の流動児童の教育状況と、親の子ど

もに対する期待について調査を行った。本研究の目的は、流動児童の教育状況とニーズを深く理解し、その上で、彼らに適切な教育を提供して教育の公平性を実現するために、どのように流動児童の教育状況を改善すればよいかについて提案することにある。

●研究方法

本研究は北京市朝陽区金盞郷の城郷結合部（都市と農村の合流地域）のある村を調査対象地にした。この村は流動人口が地元の人口を上回る典型的な村であり、2009年11月の村委員会の統計によれば、もともと村の戸籍人口は1520人であったが、女性の計画

出生登録数は3000余名にのぼった。調査対象は、無作為に抽出された流動児童の親（他の省や市から北京に移動し、戸籍が出身地に残ったまま、北京在住半年かそれ以上）と、村の6つの幼兒園の責任者とした。

研究の方法としては、アンケート、インタビュー、実地調査が用いられた。アンケートは著者らが作成したものであり、その内容に、家庭の基本的な状況、保護者の生活態度と養育態度、また、子どもの成長に対する期待および就学前教育に対する期待などが含まれている。調査は大学4年生が、「一問一答」形式で情報を収集するほか、保護者に記入の手助けをして完成させた。合計105部のアンケートが回収された。また、ランダムに21

名の幼児の保護者に対してインタビューを行い、就学前教育に対する保護者のニーズを調査した。さらに、村の6つの幼児園の運営条件と教育状況を実地調査し、教師構成、経営管理と直面している問題などについて幼児園の管理者にインタビューした。

●調査結果

1. 調査対象家庭の基本状況

調査対象となった流動児童家庭では、父親は主に大工・荷役・廃品回収・貨物輸送の運転手・小商いなどの仕事をし、母親の多くは家で小商いをするか専業主婦である。そのうち、66・2%の流動児童の保護者は中学校かそれ以下の学歴で、高校は15・3%、短大はわずか24%、4年制大学が14%であった。また、家庭の月収については、3000元以下の家庭は76・2%で、そのうち32・8%の家庭が1000元以下であった。3000～5000円の家庭は15%であった。調査対象家庭のうち、一人っ子家庭は48・6%を占め、子どもが2人いる家庭は39・0%、子どもが3人の家庭は12・4%で、各

家庭の平均は1.6人となった。

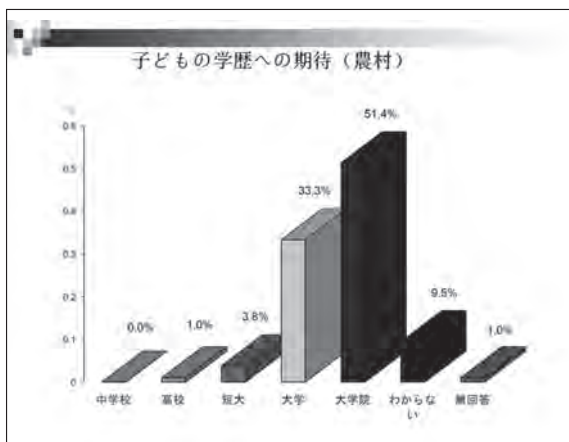
2. 保護者の子どもの将来に対する高い期待

アンケートとインタビューの結果から、流動児童の保護者は誰でも我が子の将来に対して比較的に高い期待を抱いていることが明らかになった。この結果は、同時に行われた都市部の幼児の保護者における子どもに対する期待という調査の結果とほぼ同じであり、内

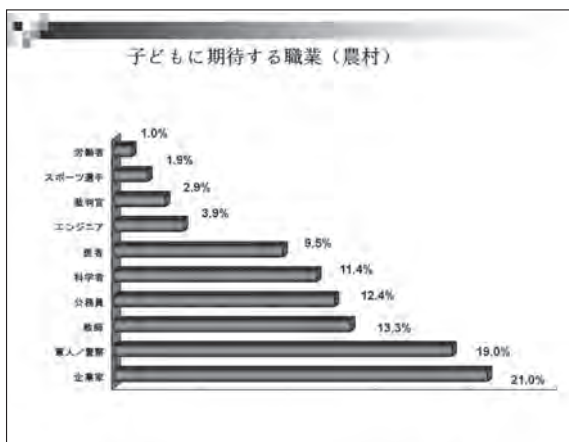
容の一部の順位に違いがあるだけであった。流動児童の保護者の期待の具体的な内容は以下の通りである。

(1)子どもに高学歴を期待している

子どもの学歴に対する期待で、51・4%の保護者が大学院、33・3%が大学、38%が短大を選び、95%の保護者がわからないと答えた。中学を卒業すればいいと選択した保護者



図①



図②

は1人もいなかった。——図①

(2)子どもに社会的地位の高い職業につくことを期待している

調査項目に挙げられた15種類の職業のうち、保護者は学歴にかかわらず、企業家、軍人、警察、教師、公務員、科学者、医者など6種類の社会的地位の高い職業を選んだ人が多く、総計86・6%であった。子どもに農民になつてほしいという保護者はいなかった。

——図②

(3)子どもにより将来を期待している

保護者の子どもの将来の生活に対する期待は主に、「生活が裕福・家庭が幸せ・生活や仕事の中で自分の特長が生かせる・社会的地位がある」という4項目に集中し、それぞれ29・0%、25・2%、17・8%、15・0%を占めている。——図③

(4)子どもにより資質を身につけてほしい

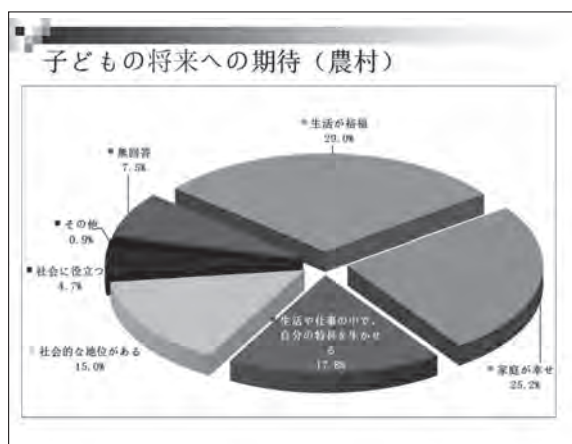
保護者が子どもに身につけてほしい資質は、「他人のことを考える・他人を思いやる・愛する心をもつ（46・7%）、苦しいことに負けない精神力（11・2%）」に集中している。その他、マナーを守ることは6.5%、責任感が

あることは5.6%、公平であることは5.6%、規則を守り、公德心があることは4.7%であった。

3. 保護者の就学前教育に対する重視と高い期待

調査によると、調査対象の保護者全員は、就学前教育の重要性を認めており、経済力があれば子どもを幼児園や入学前クラスに通わせることがわかった。子どもが幼児園で教育を受けることに對して、保護者は主に以下のことを期待している。知識（読み書き、算数、コンピュータ、英語）を学ぶ。よい生活習慣を身につける。ソーシャルスキルを習得する。体を鍛えるなど。インタビューでは、多くの保護者は、子どもが学習した知識で幼児園を評価した。それに、保護者たちは、保育費が安いこと、家から近いことと質のよい教育サービスを望んでおり、かつ教師が責任をもって、母親と同じように子どもに接してほしいと思っている。

4. 流動児童を受け入れる保育園・幼児園の安価な保育料と質の低さ



図③

この村には現在6つの幼児園がある。幼児園はいずれも未登録の幼児園であり、開園して日が浅い。4つの幼児園は半年から1年の間で、ほかの2つの幼児園はそれぞれ3年、5年であった。幼児園は中小規模に属し、幼児数も50人から180人とまちまちであり、保育費は月額200～400元（昼食代を含む）である。

6つの幼児園の運営状況と教育の質につい



て実地調査を行った。これらの幼稚園は基本的に村の適齢児童の入園問題を解決しており、保護者は全体的に満足している。しかし、以下のような問題もある。

(1)教師の質が均一でない

村の6つの幼稚園の教師は主に、ほかの地域の幼児師範学校を卒業したばかりで教師経験が1年前後と、専門的知識がない「経験教師（かつて幼稚園教師をやったことが

ある）」の2種類である。幼稚園に有資格者と専門の教師が足りないため、教育の質が保障できない。

(2)教師の仕事が多く、待遇が悪い

調査した6つの幼稚園では、どこでも1人の教師が1クラスを担当し、労働時間が1日7時間30分〜16時間30分である。賃金はほとんど月850〜1200元（北京市最低賃金が月給960元）で、社会保険はない。

(3)教育設備と教育に必要な備品が不足している

どの園舎も賃貸で、廃校になった小学校の校舎であったり、工場を改築したものであったり、住宅用の建物であったりする場合もある。日当たりが悪く、部屋が小さく、室内の活動スペースが足りない。また、教室には、机、椅子、黒板とテレビ以外の設備がほとんどない。教育の道具やおもちゃも全くない、あるいは少しだけである。なお、一部の新設の幼稚園では少し条件が改善されているようだ。

(4)教育の質が悪く、教育方式が単調である

調査した多くのクラスは、文字の読み書き・算数・童謡という教育内容で、基本的に遊び時間はなく、幼児や教師が使える遊びの道具もなかった。教師は基本的な教育技能に欠け、子どもの発達と能力などについての基本知識が不足しているため、その教育活動は教材の内容を講じることにとどまり、幼児の吸収力や幼児に適した教育方法などを配慮していない、もしくは不十分である。

(5) 幼児園周辺の環境が悪く、安全面に不安な要素がある

村は汚く雑然としていて環境がよいとは言えず、道路が狭く、乗用車や小型農用車、自転車などが絶え間なく行き交う状態である。車道のすぐ脇に建っている幼児園もあった。

(6) 経営資金が不足している

村の幼児園は、主に毎月の保育料で経営を維持している。保育料収入は主に園舎の家賃や教職員の給料、事務用品購入費などの支払いに使われる。資金の面において園の負担は比較的重い。

●考察と提案

ユネスコは、こう指摘している。丁寧に設計された幼児保育と教育計画は、成長期にある幼児とその将来の福祉を大きく増進させることができる。すなわち、子どもの認知発達を促し、小学校入学率を高め、最初の数年間の学校教育で比較的良好な成績を得る助けとなり、それは不利な境遇に置かれている子ども

にも対しても同様である。同時にまた、幼児保育と教育計画は社会の不平等を縮小し、貧困や性別、人種、移民系あるいは宗教などの要素が作りだした、子どもが被害を受けやすく、不利な境遇に置かれるという状態を補うことができる^(注2)。流動児童について言えば、良好な教育は彼らに公平な競争と社会的地位を向上できる機会を提供し、彼らが貧困と不利な境遇を脱し、保護者が期待する高学歴でかつ裕福で幸せな将来の生活を実現する助けとなることができる。

本調査は1つの村で実施しただけで、その結果はグループ全体の状況を反映することはできないとしても、そのおおよそをうかがい知ることができる。調査により、多数の都市に流入する流動児童、特に農民工の子どもは多くの面で制限を受けるが、まさに教育を受ける権利と機会と教育環境が不利な状態にあるという問題に直面していることがわかった。都市児童と比べると、保護者たちの我が子に対する期待は同じようであっても、流動児童と都市児童が受ける教育の機会と条件には大きな差があり、それが流動児童が保護者

の期待をなかなか実現できない原因となっている。「スタートラインで遅れをとる」ことは、こうした子どもたちが向き合わざるを得ない現実なのである。

実践からわかるように、公平な教育は、公平な社会の基盤であり、調和のとれた社会を保障し、経済的格差を縮め、人的資源の質を高めるためには、就学前段階から、公平な教育を実施することが絶対的に必要である。そこで、社会が大きく変化する中、都市に生まれた大量の流動児童に目を向け、国家と地方が、彼らに有利になるような政策を制定して教育の不公平を具体的には正し、流動児童の教育状況を少しずつ改善していけるよう、以下の4点を提案したい。

1. 都市郊外と農村の公立幼児園の建設力を大きくし、教育資源の均等分配を具体化する。都市郊外と農村が公立幼児園を開けば、都市周辺地域に当たる現地の住民の子どもと流動児童に良質な幼児教育サービスを提供できるだけでなく、各種教育の見学の機会や教師の育成サービス

を提供することで、輻射作用、モデル作用、促進作用を発揮し、都市郊外と農村の幼児教育機関の中心的な役割を果たすことが可能である。

2. 社会的力を奨励して、園を運営し、公立の幼児教育の資金不足を補う。政府は購買サービスの方式を取り入れ、基本的安全性を備え、一定の運営条件および基礎を有する農村や都市農村交錯地域の私立幼稚園・家庭託児所（未登録幼稚園を含む）に対して資金援助をし、その教育条件や環境の改善を促し、幼稚園教育の基本的要求を果たせるようにすることも可能である。

3. 未登録の幼稚園に対する管理と指導を強化し、運営の質を高める。地方政府は未登録の幼稚園をその管理の視野に組み入れ、幼稚園の運営条件について実情に応じて、要求を定め、徐々に標準にまで引き上げていくべきである。同時に、各種の育成活動を行い、幼稚園に技術的援助を行い、これらの幼稚園が適切に教育のレベルと質を高める手助けとし、教育の

状況を改善していく。

4. 地域社会と園に依託して、流動児童の保護者向けに講座や情報提供の場を設けるなどの教育指導活動を行い、流動児童の保護者が子女の教育の過程でぶつかるいくつかの問題を解決する手助けをし、地域社会の家庭教育支援を進める。

注1 ●本研究は中華女子学院と日本の九州女子大学の共同研究プロジェクト「社会変化の中の中国児童の現状と保育研究」の研究成果の一部である。中国側の参加メンバーは王練・孫曉梅・戴莉・崔巍・池麗萍・余珍有・屈維・王璐。
注2 ●ユネスコ「グローバルモニタリングレポート2007」ゆるぎない基盤 乳幼児のケアおよび教育。

王 練



中華女子学院児童発達と教育学院院長、修士課程指導教師。華西医科大学公共衛生専攻学科卒。現在、中国就学前教育研究会健康専門委員会常任委員、北京市就学前教育学会理事。

専門は就学前児童健康と保健、児童栄養、幼児教諭育成。主な著書と論文は『幼児栄養学』、『中国の家庭教育——0～3歳児の保護者向け』、『成長の困惑——子どもの問題行動とさようならをする』、『保育士、国家職業資格育成カリキュラム』（副編集長）、『中米幼児交際衝突と教師管理の異文化比較』、『女子校大学生の科学リテラシーの調査分析と対策』、『中華女子学院就学前教育学部特色専攻建設の実践と思考』など。



就学前教育の公平性についての考察 (注1)

— 湖南省37～48か月の幼児1000名を対象にした発達調査

周 念麗

華東師範大学副教授

Zhou Nianli

●問題提起

いわゆる就学前教育の公平性とは、弱者の立場に置かれた就学前の子どもでも、恵まれた立場にある集団と同等の教育を享受することができるということである。ところが、我が国の現状を見ると、約80%を占める農村の幼児は、平均的な就学前教育をあまり受けられておらず、農村での幼児園入園率はおよそ20%前後しかない。その上、例えば入園したとしても、ほとんどの幼児園が小学校化された授業内容であるため、本当の意味での就学前教育を受けられているとは言い難い。それと同時に、彼らの父親世代も同じく良質な教育をあまり受けておらず、多くの若い父母は外に働きに出ており、年長いた、文化的水準がより低い祖父母が面倒を見ているのが現状である。農村の幼児の発達にとって一体どんな影響が考えられるだろうか。彼らに適した就学前教育をどのように実施し、その公平性を具体化していけばよいのだ

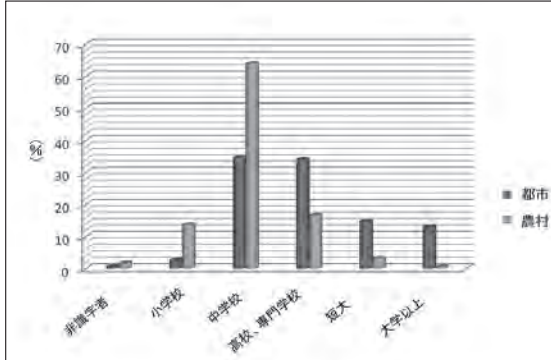


図1 父親の学歴、都市と農村の比較

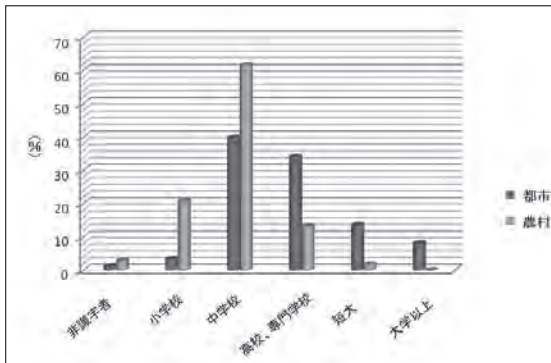


図2 母親の学歴、都市と農村の比較

地区	人口(万人)	1人当たりGDP(元)／年
長沙市開福区	251	45765
常德市鼎城区	150	32866
懷化市洪江区	7	23468
寧郷県	124	22659
津市市	25	16969
嘉禾県	32	15285
祁東県	86	13469
澧県	79	12723
祁陽県	88	11495
縵寧県	31	10834
双峰県	87	9517
江華県	41	8578
辰溪県	48	7868
寧遠県	69	7051
鳳凰県	35	6491
新化県	121	5622

表① サンプルング地区人口と平均収入(注2)

ろうか。私たちはこのような課題をもって、2010年3月から5月にかけて、湖南省の17の県と市において、都市と農村の37～48か月の子どもに対する比較調査を行った。

●調査研究の方法

1. 調査対象

調査対象は37～48か月の幼児とその保護者とし、そのうち都市は313組、農村は699組である。

都市と農村の父母の学歴の比較は図①と図②を参照。

図①と図②から、抽出された農村の保護者の中で、父母の学歴の大多数が集中しているのは小中学校であるが、都市では大多数が中学・高校・専門学校がそれ以上に集中していることがわかる。

父母の学歴以外に、サンプルングの上で経済分野も考慮した。

GDPの分布によって、1人当たり年平均GDPが1～2万元以下の農村地区12箇所と1人当たり年平均GDPが2万元以上の都市地区4箇所を選び出した。詳しくは表①を参照されたい。

2. 調査のツール

以下3種類の調査表を使用した。

- ・『幼児の育児者調査アンケート』(世界銀行と共同編集)
- ・『37～48か月の子どもの社会性と感情コントロールの発達』(独自開発)
- ・『認知・言語と運動の発達』(独自開発)

3. 調査の方法

一問一答形式で育児者に対して訪問調査を実施し、その際に幼児に對しても一対一の面接テストを行った。

●調査結果

1. 育児者の居住地とその特徴

地区	母親	父親	祖母 (父方)	祖父 (父方)	祖母 (母方)	祖父 (母方)	その他
長沙市開福区	75	17	6	1	2	0	0
常德市鼎城区	56	11	28	4	2	0	0
懷化市洪江区	54	20	12	6	6	2	0
寧郷県	64	7	17	8	2	1	0
津市市	46	8	28	12	3	3	0
嘉禾県	42	6	29	14	6	0	3
祁東県	48	16	26	4	5	0	0
澧県	37	4	37	20	0	2	0
祁陽県	37	17	34	3	3	2	3
縵寧県	37	20	32	12	0	0	0
双峰県	33	4	41	19	0	0	4
江華県	43	12	27	12	7	0	0
辰溪県	54	8	19	10	4	5	0
寧遠県	35	32	15	12	3	0	3
鳳凰県	38	9	50	3	0	0	0
新化県	40	20	15	10	10	3	3

表② サンプルング地区の育児者の割合 (%)

今回の調査対象の育児者の居住地区と平均収入は表①を参照。

表②からわかるように、都市では母親自ら育児を行っている割合が54～75%であるが、農村地区では33～48%であった。貧困地区では父母が自分で育児をしている割合は平均で37%である。

2. 親子での読書と遊び

「親子読書」と「親子遊び」という育児行動についての都市と農村の比較は表③を参照されたい。

表③では、農村の育児者が毎週幼児に付き添って読書をする時間と一緒に遊ぶ時間は、平均で2.801レベルで都市の育児者よりも低くなっていることを表している。

3. 子どもの入園率

調査を受けた幼児の入園率は表④を参照。

表④では、都市地区の子どもの入園率が87～92%を超えるのに対して、農村地区では平均23%であり、鳳凰県のように0%という極端な

育児行動		都市と農村	
		都市部	農村
読書回数(毎週)	1～2回	39%	61%
	2回以上	61%	39%
読書時間(時間)		1.50	1.29***
遊び時間(時間)	平均値	1.85	1.61***

表③ 親子読書と親子遊びを行った回数の比較

地区	入園していない	入園している
長沙市開福区※	8	92
常德市鼎城区※	13	87
懷化市洪江区※	13	87
寧鄉県	44	56
津市市	19	81
嘉禾県	49	51
祁東県	27	73
澧県	22	78
祁陽県	30	70
縉寧県	60	40
双峰県※※	70	30
江華県	62	38
辰溪県	42	58
寧遠県※※	77	23
鳳凰県※※	100	0
新化県	35	65

表④ 子どもの入園率(%)
(表の※は都市部の代表とし、※※は農村地域の代表とする。)

状況もあることをはっきり示している。

4. 子どもの発達の評価結果

子どもの「言語」「認知」「運動」の3大分野における心理テストの結果は表⑤に詳しく示している。

心理テストは点数が高いほど成績がよい。表⑤からは、農村の子どもは、全心理テスト項目においてかなり顕著なレベルで、都市で抽出された子どもより低いことがはっきり見てとれる。

● 考察と提案

上述の結果から、非常にはっきりとした現実が見えてきた。農村の子どもは、父母の経済力や、学歴の低さに加え、父母自ら育てる割合が低く、子どもと一緒に本を読んだり遊んだりするなどの行動が大変少ない。また、入園が困難などの原因から、発達のどの側面においても、明らかに都市の子どもよりも成績が低かった。

この現状は、私たちが深く考えるべき問題である。数多くの農村の子どもたちが公平な就学前教育を享受できるようにし、彼らの人生の、発展の基礎固めをしていくためにはどうすればよいかということ、これは、私たち就学前教育に携わる者の眼前に置かれた重要な課題である。

私たちは当面その父母たちの学歴や経済的地位を変えることはできないが、そうした中にあっても、積極的に働きかけることで育児の意識を高め、保護者の育児行動を改善し、農村幼稚園を創設するなどの方面に重点をおいて、農村に適した具体的な就学前教育を提案することができはるはずである。

以下にその具体的提案を述べたいと思う。

(1) 保護者が子どもに対して積極的に働きかける意識を高めることが大事である

農村の保護者が、子どもと一緒に本を読もうという意識を高める。

テスト項目	都市部		農村		平均		差異(Sig.)
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
言語の認識	2.45	1.07	1.58	1.34	1.86	1.33	.000
言語の表現	9.83	2.16	7.88	2.88	8.52	2.82	.000
言語能力	12.27	2.74	9.45	3.55	10.38	3.56	.000
他者認知	3.89	0.55	3.65	1.02	3.73	0.90	.000
自己認知	2.47	1.50	1.44	1.53	1.78	1.59	.000
自他認知	6.36	1.70	5.09	2.04	5.51	2.02	.000
細かい動作	1.48	0.71	1.05	0.81	1.19	0.81	.000
大きな動作	1.50	0.69	1.04	0.79	1.19	0.79	.000
運動能力	2.98	1.20	2.09	1.36	2.39	1.37	.000
図形認知	1.29	1.28	0.40	0.81	0.69	1.07	.000
数的認知	6.99	3.83	3.73	4.05	4.80	4.26	.000
思考力	8.28	4.41	4.13	4.41	5.49	4.82	.000
記憶力	2.02	1.63	1.34	1.55	1.56	1.61	.000
情緒弁別	1.10	0.80	0.70	0.79	0.83	0.82	.000

表5 子どもの心理テストの成績：都市と農村の平均値の比較

農村家庭に「微笑みとともに本を贈る」活動を通して、農村の幼児が10冊以上の児童書を持てるようにする。同時に、保護者が少なくとも1日30分は子どもと一緒に絵本を読むことを習慣とするようにしていく。

(2) 農村の保護者に、子どもと一緒に遊ぼうという意識を高める

玩具を贈ったり、ボランティアの方に廃材や自然の材料を利用した簡単な玩具の作り方を伝授してもらったりして、子どもたちがそれぞれ10個かそれ以上の、心身の発達に合った玩具を持てるようにする。それと同時に、農村の保護者をもつ「業精于勤而荒于嬉」(学問や芸は勤勉によって進むが、遊んでいると退歩する)という伝統的概念に説明を加え、親子で一緒に遊ぶことの重要性を十分に理解してもらい、毎日子どもと少なくとも1時間は遊ぶようにしていく。

(3) その土地の資源を利用して、農村幼児園を増設する

農村幼児園の入園率が低い状況について現地の教育局と協議をし、土地柄に合った各種の簡易幼児園を開設する必要がある。いわゆる簡易幼児園とは、現地の文化的物理的資源を利用して、不十分ながらも各種の遊びを中心として運営される幼児園である。遊びを通じて、5大領域^(注3)の内容が有機的に浸透していくのである。

簡易幼児園の教師は、2つの部分から構成することができる。1つは、教師の養成教育を受けた者で、現地のやる気と能力を備えた若者を、資格をもった農村幼児園教師として養成する。もう1つは、ボラ

ンティアの募集を通して、農村地区にある省内の高校または幼児師範学校就学前教育を専門とする学生を教育実習生として、教師が必要なこれらの農村地区へ派遣して実践を積むようにする。任期は3か月でも6か月でも、長くて1年でもよい。

最後に、広大な農村の多くの幼児が真の意味での公平な就学前教育を受けられるようにするために、私たちは、家庭と幼児園という2つのミクロ社会の生態環境から着手して、保護者の育児についての意識を向上させ、その子どもたちの発達に適した簡易幼児園を創設し、就学前教育の実り多き成果を分かち合えるようにしなければならない。

注1 ●本研究は、世界銀行アジア教育研究部及び中国国家人口計画出産委員会育成と交流センターの大きな支援を受けて実施した。ここに感謝の意を表します。

注2 ● <http://www.bbs.rednet.cn> のデータより。

注3 ● 5大領域：中国教育部で施行された《幼児園教育指導綱要》では、幼児園教育の内容について5つの領域を定めている。すなわち、健康、社会、科学、言語、芸術。それを5大領域と呼んでいる。

周 念麗



心理学博士。華東師範大学副教授。研究領域は児童心理、親子関係、0～3歳児の多元知能の測定と育成方案など。1995年お茶の水女子大学心理学士号取得。1998年東京大学大学院教育学修士号取得。2003年中国華東師範大学心理学博士学位取得。2004年6～12月、米国Arizona State University客員研究員として、乳幼児の情緒発達を研究。2006年5月～2007年3月、国際交流基金フェローとして、名古屋大学で統合保育について研究。

主な著書は、『就学前児童の発達心理学』、『就学前児童の心理健康と指導』、『自閉症児の社会認知——理論と実験研究』、『就学前特殊児童の統合保育における比較と実証研究』、『0～3歳児の多元知能の評価と育成』。

幼小の資源共有・双方向連携で、小学校入学への適応力を高める

鄒平

大地実験幼児園園長

.....Zou Ping

●はじめに

「幼小連携」は北京市東城区の学校段階別連携教育の有効な実践と探求の画期的プログラムとして、予備調査、調査論証、思索立案、プラン設計、小学校に入り込むことから双方向の協力過程を経て、必要性和実行可能性の初段階調査と研究、理性的な分析研究の基礎の上に「幼小連携教育一体化」モデル研究プログラムを確立した。我が園はサブ課題「幼児園と小学校の双方向連携、幼児の入学適応性向上の研究」を提案し、研究チームを組織し、設備施設を整備し、研究の方向性を確定した。研究の目的は、資源の共同享受、双方向連携、教師と幼児の相互的活動、家庭と園の協力、幼児の入学適応能力の向上である。

2010年9月1日、大地実験幼児園と近隣の花市小学校が連携して「花市・大地幼児園」―幼小連携クラス―を正式に開校させ、北

京市で初めて規範化した、幼児園と小学校の連携クラスとなった。すなわち、大地実験幼児園は3つの年長クラスを花市小学校に付設させ、地域隣接というメリットを生かした。小学校の一部の空き教室を利用してクラスを開き、双方の主体的関与、一体化管理モデルの研究を試み、資源の共同享受、双方向連携と新時代の幼小連携の有効な管理モデルを探求し、幼小教育の教授実効性の増進に役立つカリキュラム体系を構築する。これは一方で幼児の入学適応力を向上させ、もう一方で北京の入園難という現実問題をしだいに緩和させることになる。

●「幼小連携」のモデルを模索し、教育運営の効果を高める

幼小連携教育とは、幼児園と小学校の間の教育教養内容および実施方法における相互連絡、相互連携を意味している。現在の幼小連携教

育を分析すると以下の問題が存在する。すなわち、それぞれが勝手にふるまう現象が見られ、交流協力と双方向連携に欠けていること、連携内容が不十分で、幼小連携を小学校教育の先取りとみなして幼児に小学校の知識を前倒しして学習させていること、連携カリキュラムが科学的、体系的、実践的に行われていない点に問題がある。

さらに幼小連携の問題およびその原因を探るために、我々は、幼児の入学適応力と幼小双方向連携という視点から、小学校教師と管理職、幼児の保護者、幼児園教師へアンケート調査の調査研究を行い、異なる声に耳を傾けることにした。所在区にある9カ所の、性質、タイプ、規模の異なる小学校を選び、18名の管理職と62名の教師および幼児園年長クラスの保護者と幼児園教師にアンケート調査を行った。調査で明らかになったのは、学校、幼児園、保護者の結果が基本的に一致し、幼児の社会適応性の問題が学習適応性の問題を上回ったことである。社会適応性における主な問題は、「日常生活の自立」「人とのかわり」「時間観念」「自己コントロール」「他人との協力」等であり、学習適応性における主な問題は「人の話を聞くこと」「注意力」「理解力」「表現力」「読み書き能力」などであった。分析の結果、幼児のさまざまな適応性における問題の原因は主に以下にある。1つは学校、幼児園、家庭間の協力関係が不十分であること。2つには幼児園と小学校が、生活環境、文化環境、教育方法、授業内容、家庭とのコミュニケーション方法などの面において大きく異なっていること。3つには、保護者の幼小連携教育に対する取り組みに違いがあることである。

我々のこれまでの幼小連携教育におけるいくつかのやり方を振り

返ってみた。連携の方法においては、幼児園の小学校への歩み寄り、連携主体においては、主にさまざまな活動を行う教師のあり方、連携内容においては、環境見学、学習活動への参加、質疑応答の形式を用いた。連携時期においては入学半年前か1年前からスタートし、ニーズに応じて数回の見学や双方向の交流活動を行っている。例えば、幼児園教師が子どもたちを連れて、近くの小学校を見学したり、小学校の教室に入って、座談会などを行ったりする。学校生活、環境を観察理解させ、小学生との活動によって、小学校の学習活動、環境を実感させている。このようなことからわかるように、これまでの幼小連携は、一方通行であり、表面的で、一方的であった。幼児は「ゲスト」として小学校に入りさまざまな活動に参加し、短期的にはよい効果をあげているが、しかし長期的効果から見ると、幼児の小学校入学ならびに小学校生活や学習への適応に対する効果は決して大きくはなかった。

幼小連携の問題およびその原因に対する深い反省により、我々は考えを変えるよう促され、幼児の持続可能な発達の助けとなるような幼小連携教育の有効な管理と教育モデルを思考し、探し求めた。我々は、就学前の子どもの発達には段階性と連続性の特徴に従い、エコロジカルセオリーと生涯教育思想に基づく幼小連携教育を実施し、各教育段階の連続性および、子どもの持続可能な発達に関心を払って、幼小連携教育を就学前連携教育の1つの段階とし、幼児を幼小連携教育の主体としてとらえた。親子クラス、半日クラス、全日クラス、幼小連携クラスの「就学前児童の一体化」研究を我が園において展開した。さ

らに、小学校の中に幼小連携クラスを設置し、小学校が提供する校舍、教師、教室等の教育資源を利用して園経営を行い、一体化管理によって、資源の共有、教育の共有を実現し、既存資源による教育効果を最大限に発揮させ、運営の効率を向上させると同時に、幼児に本物の小学校の生活環境と文化環境を提供することができた。また、幼児園教育のニーズと幼児の発達ニーズに応じて、屋内外の生活環境と教育環境を作り、幼児がなじみやすい環境を作りだし、環境から実際の生活への移行を実現し、園と小学校における生活、学習、家庭との連絡方法などの違いを実感させる。幼児園と小学校の「双方向連携」を通して、幼児の入学適応性を向上させ、幼児が急な変化に戸惑うことなく、自然に移行ができるよう手助けする。

●幼小連携カリキュラムを体系化し、教育指導の効果を高める

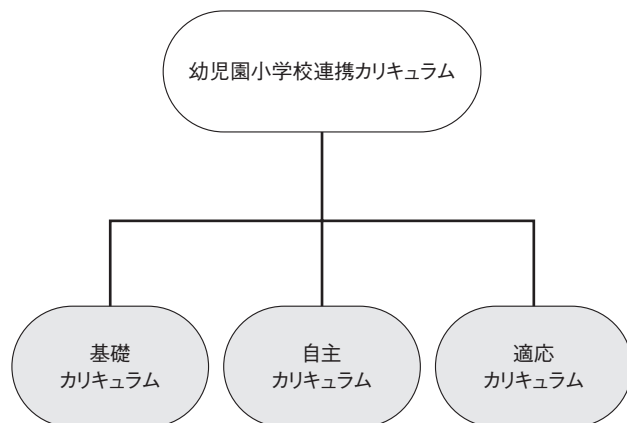
幼小連携カリキュラムは『幼児園教育指導綱要』、エコロジカルセオリ、生涯教育思想を指針に、就学前児童の精神的発達の特徴、幼児の発達ニーズ、幼児の入学適応性要求をよりどころとして、幼小連携教育を実施する。園の方針である「グローバルな視野で全人格的な教育を目指す」という考え方を受け継ぎ、多元知能理論のカリキュラム体系を構築する。幼児の発達目標を、潜在能力の開発、適度な先取り、個性の育み、全面的な発達におく。学習形式では分野別教育の少人数クラスで、才能芸術活動の自由選択性、進度別クラス制、英語活

動などを採用する。同時に幼小連携教育の双方向性、全面性、段階性、発展性の原則に従い、基礎カリキュラム、自主カリキュラム、適応カリキュラムからなる幼小連携カリキュラム体系を共同で研究開発し、生活がすなわち教育であるということとを具現化する。幼児が健全で、楽しく、自信をもち、自主的に小学校の学習生活に適応し、持続可能な発達と生涯学習の基礎を固める。

以下の図で示したように、3つのカリキュラムと幼児の生活は密接に関連し、お互い浸透し、補完し合うことで、有機的に結びついていなければならない。

1. 基礎カリキュラム——分野別カリキュラムをメインとする

『幼児園教育指導綱要』によれば、幼児の年齢的特徴、発達ニーズに基づき1日の生活適応カリキュラムはクラス全体とグループ学習を



組み合わせた形式で、ストーリーを想像しながらの読書、数学、科学、スポーツ、美術、音楽、パソコンの授業を展開する。各分野の内容は相互に浸透し合い、有機的に結合して、生活すなわち教育を具現化し、1日の生活の中で学び、幼児の全面的な発達を目指す。

2. 自主カリキュラム——自由選択の遊び、自発的な活動

幼児の個性と興味を尊重し、自由に選択、学習、問題解決する時間と空間を提供する。子どもの遊びエリアを作り、「楽しい一日」などをテーマに、芸術工作、粘土遊び、出し物ショー、英語、クッキング、外遊びなど、自由な発想のもと、子どもの自発的な活動を促す。

3. 適応カリキュラム——生活カリキュラム、思考力のトレーニングをメインとする

幼小連携の問題とニーズに基づき、教育を日常生活の中に浸透させ、生活カリキュラム、思考ゲーム、社会と健康、道徳と生活、自主活動等を展開する。幼児の休み時間を少しずつ調整し、大人の助けによって、幼児の入学適応力を向上させる。

幼児園と小学校は2つの異なる教育段階として、環境設備や文化環境において差異が存在しているばかりでなく、教育内容、教育方法等の方面においても異なる。これは幼児の小学校入学不適応の原因でもあり、幼小連携の重点でもある。このため、幼小連携クラスを学校に開設し、幼児がよく知っている先生、同じ年齢の仲間、保護者とともに小学校に足を踏み入れ、新しい環境と生活に適応するのを助け、一

歩一歩小学校の文化と雰囲気溶け込み、環境の変化が引き起こす不慣れな感覚と不適応を減少させる。環境資源の共同享受から教育資源の共同享受へ一歩一歩移行するのを助け、それにより外から内への双方向連携を実現する。

2010年8月23日、楽しく引越しが行われて以来、子どもたちは新しい環境のもとで、一定の時間を生活し、幼児園と小学校の双方向に連携がとれた、幼児の生活に則したテーマ教育活動を次々展開した。その活動には「異なる開校式典」「お兄さんお姉さんと一緒に旗を掲揚する」「私たちの新規則」「新しいお友達と仲良くしよう」「特別な教師の日」「歯の愛護デー」「私の〃十一〃国慶節活動計画」などがある。これらすべてに子どもたちの変化や成長過程が刻まれた。環境変化直後のあまり適応していない状態から一歩一歩新しい環境に適応するまでや、生活習慣が乱された状態から新しい生活習慣を改めて構築するまで、不慣れな状態から進んで学校のお兄さん・お姉さん・先生にあいさつし、交流する状態へ、学校の「小さなゲスト」から校内の「小さなホスト」になったことや、受動的な傍観者から主動的な関与者への変化などが挙げられる。保護者へ開放した親子の共同活動もある。「親子身体能力ゲーム」「保護者国慶節を語る」「忘れがたい中秋節」「錦秋の休日親子運動会」など、これらによって、保護者は子どもに親しみ、学校に足を踏み入れ、身をもって教育を体験し、体感した。豊富で多彩な幼小連携活動の中で、子どもたちは成長し、自主的になった。それにより彼らは楽しみながら、学校生活の面白さを体験した。保護者たちは活動をよく知ることによって安心し、さらに積極的

に幼稚園の仕事に関与し、支持するようになった。

● 私たちの考え

幼稚園と小学校が協力して管理し、幼小連携クラスを共同開設するのは、新しい試みである。管理にしても、カリキュラムにしても、手



鄒 平



北京市大地実験幼稚園園長、北京市大地幼児教育センター主任、北京市陣鶴琴研究会理事、北京市保教協会理事、中学高級教師。

26年間幼児教育に従事し、数多くの国家レベルおよび市レベルの教育研究課題に参画した。就学前の児童教育管理、教師育成、カリキュラム改革及び幼稚園の発展などの面において、大量の研究を重ね、研究成果を得た。2009年に第1回目の全国優秀私立幼稚園園長賞を受賞した。

全国および市のコンテストで数多くの論文賞受賞。その中の「児童の楽しい読書習慣の養成および適切な教育行為についての研究」という論文は、中国教育学会第18回日優秀論文賞二等賞を受賞し、北京市就学前教育”第十次五か年計画”優秀論文賞一等賞も受賞した。北京師範大学出版社『児童の良好習慣の養成シリーズ』の編集委員を務めた。

本にできるような成熟した事例は多くはない。実践の中で、我々も探求、研究中である。2つの異なる年齢の子どもたちが、教育管理と教育教授の活動上で思想と理念の違いによる衝突も起こった。それにより、我々はさらに深く考えさせられた。教育理念と教師の行動においても変化が発生した。もし我々が角度を変えて幼児を見たら、もし我々が子どもたちに適した環境と教育を作ったならば、子どもの潜在能力は巨大なものになる。一人一人の子どもを信じ、一人一人の子どもを伸ばそう。我々のプロジェクトはまだスタートしたばかりである。幼小連携一体化の管理モデルと幼小連携カリキュラムにはさらに一層の探求、実践、研究が待たれている。それによる教育効果を子どもたちの長期発達に従わせ、奉仕させ、絶え間なく管理と教育の質を向上させよう。

食育

食育で健康な体をつくる

北京師範大学教授 万鈞 (Wan Fang)

「食育」で健康な体をつくる、それは可愛い我が子のために保護者が常に重きを置いている事柄である。だが、果たして、お金をかけて十分な量を食わせるだけで、健康な体をつくれるのだろうか？ 現実はそのようではない。子どもに食事を与える際に、まず「食育」を重視してこそ、食育で健康と賢さを育てるという目的を達成できるのである。

では、3〜6歳の子どもに対して行う「食育」の中身とはどんなものなのだろうか。以下の6つの項目について述べたいと思う。

1. 味を工夫し、バランスのよい食事をとる
2. 腹八分にして、よい「刷り込み」をしておく

3. 薄味は幼児期に養われる
4. 食、食べ物と便のチェックは、予算と決算
5. 飲食時には自己防衛、食の基礎知識
6. ルールを守って、心身ともに健康になる

■味を工夫し、バランスの良い食事をとる

各家庭には、それぞれ独自の献立がある。例えば、ある家庭では毎食必ず野菜を食べるが、肉が欠かせない家庭もあり、毎日果物を食べる家庭もあれば、食べるとは限らない家庭もある。また、毎日牛乳を飲む家庭、毎日スープを作る家庭もある。

献立をより合理的に組み換え、食事から子ども

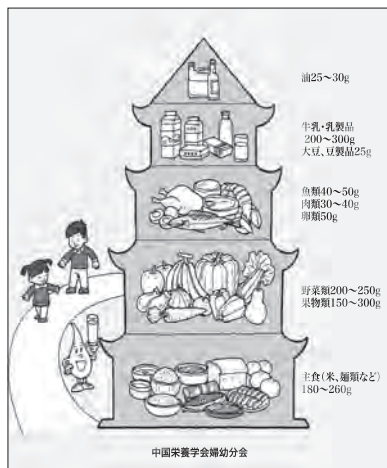
の健康な体をつくるにはどうすればよいのだろうか。中国栄養学会婦幼分会の出した答えを見てみよう。

もし、保護者が幼児に与える献立を、「食事バランスタワー」の各階と基本的な分量に沿って作ることができれば、種類豊富でバランスがよい食事といえる。

バランスのよい食事にするために大事なものは、味を工夫し、調和のとれた味付けにすることである。家庭の食べ物の枠を広げ、各種類の食物を合理的に組み合わせたい。

同じ種類の食べ物（食事バランスタワーの各階を1つのグループと考えてよい）の中で、常に組み合わせを変えてもよいし、子どもがある食べ物





を嫌いでも、「偏食」と決めつけてはいけない。例を挙げると、にんじんが嫌いだからといって無理に食べさせる必要はない。濃い緑の野菜、赤や黄色の野菜、果物などカロテンを多く含む食物はたくさんあるし、レバーをこまめに食べることで、直接ビタミンAをとることもできる。

にんじんを炒めて食べるのが嫌いな女の子の話がある。母親が「にんじんを食べないと、大きくなれないどころか、縮んで親指みたいに小さくなって、ネズミのお嫁さんにしかなれないんだよ」と言っただけだったので、その子は、ネズミのお嫁さんになるかもしれないと心配で心配で、悩みだしたそうである。実際、嫌いでも無理強いしてはいけないのである。または調理の仕方を変えてみるのもよい。にんじんをわからないように肉に混ぜて餃子を作り、一口で食べられるような小さい餃子

にすると、子どもは必ず食べられるし、「おいしい！」という声も聞けるに違いない。

家庭の食物の枠を広げるには、まず買い物かごの中身から情性を克服しなければならない。市場で野菜を買うのも、一種の情性と同じで、毎回おなじみの店を何軒か回り、何種類か同じ野菜を買って帰っている。子どもへの食育の観念が身についたら、新しい味を開拓し、味覚を養い、食物の多様化を図らなければならないので、買い物にも新しい発想が生まれる。例えば、黒、白、紫、緑、黄、赤それぞれの色の野菜を買い揃えるというように。根菜類（大根、にんじんなど）、生の豆類（いんげん、そらまめ、えんどうなど）、ナス科やウリ科の野菜（ナス、トマト、ピーマン、きゅうり、かぼちゃなど）、柔らかい茎野菜や葉物、花野菜類（白菜、青梗菜、カリフラワーなど）、各種類を買う。茎や葉物、花野菜は多めに買うのがよい。そうすれば、食卓はいろいろな野菜で美しく彩られ、素晴らしい効果が得られるだろう。

■腹八分にして、よい「刷り込み」をしておく

以前アメリカのある栄養研究センターで行われた実験である。1匹のシヨウジョウバエをアイスクリームの上に放すと、食べて満腹になるとすぐにそこから飛んで離れていくが、満腹感を司る中枢を破壊してから放すと、シヨウジョウバエは食

べすぎて死んでしまった。

小さな虫でさえ空腹感と満腹感を知っているのだから、人間も当然であろう。人体には空腹と満腹を調節する中枢が備わっていて、空腹になれば食べ、満腹になれば止める。だがしかし、食べ過ぎてしまう肥満の子どもがますます増えているのは何故なのだろうか。

最も根本的な原因は、保護者の間違った判断にある。1～2歳から成長速度が遅くなるのは正常な発育で、体の変化も正常なのだが、その現象を正常でないと見なし、栄養が足りないからたくさん食べるのがよいと思ってしまうのである。

正常な発育の法則によれば、満1歳からは成長速度が明らかにゆっくりになり、体つきにもはつきりとした変化が現れる。つまり、筋組織（筋肉、骨格、血液など）が占める割合が増加し、脂肪組織の割合は低下し、外見は前より痩せて見え、「縮んだ」ようでもある、しかし、実質的には、乳児期の「乳太り」から幼児期の「堅太り」に変化したのである。

判断が間違った結果、保護者は子どもの食事に過度に干渉し、毎食「もっと食べなさい」と要求することになる。子どもは、保護者の欲心を買うためにいつもその小さなお腹をいっぱい膨らませる。その結果、脂肪組織が体内に蓄積され、よくない「新陳代謝のパターン」が始まり、悪い「新陳代謝の刷り込み」がなされてしまう。

20世紀に、西洋の学者がまず「刷り込まれた新陳代謝」という学説を提出したが、その中心的内容は、「生後初期に栄養過多になると、新陳代謝が正常ではなくなり、刷り込み」と同じく一生影響を受ける」というものだ。よくない「新陳代謝の刷り込み」につながる主な原因は過度に食べさせることで、「お腹が空いたら食べて、いっぱいになったらやめる」という生理的法則が壊れたために、食べすぎとなってしまうのである。保護者は、「子どもはまるまる太っているのが福々しい」という思い込みをしないほしい。太っても痩せてもいないのが健康なのである。

■薄味は幼児期に養われる

塩やナトリウムが多いと心臓や血管の健康に良くない。しかも、ナトリウムはカルシウムの排出を助けるので、「塩分が多いとカルシウムが失われる」ことになるため、塩分を控えることはカルシウムを補う効果があるといえる。

また、油が多いと、カロリーオーバーになりやすい。

保護者には次の数字を覚えておいてほしい。3〜6歳では、1日に摂取できる塩の量は、2.3g以下、だいたい成人の1/3（成人は6g/日を超えない）である。

だから料理の際には、薄味を心がける必要がある

る。味見してみても丁度よい塩加減だと思えても、子どもにとっては「味が濃い」ということになる。そのほかに、「塩味スナック」も控えるべきである。例えば干し魚のナトリウム含有量は、だし醤油（ナトリウム含有量100g）に相当する。ソーセージ、ハム、インスタントラーメン、ビーフジャーキー、ひまわりの種、五香豆などはみなナトリウム含有量が高い「塩味スナック」である。「スポーツ飲料」については、これこそ「塩味飲料」で、子どもには、普段の飲み物としては与えないようにする。

もう1つ覚えておくべき数字がある。3〜6歳では、1日の油使用の適量は25〜30gである。

もし、油条（ヨウタイアオ／揚げパン）やポテトチップス、唐揚げ、揚げ麩などを常に食べているなら、油の摂取量は、限度をはるかに超えてしまう。

小さい頃から、塩と油を控えた薄味を習慣づけられれば、生涯にわたって体のためになるだろう。

■食べ物と便のチェックは、予算と決算

献立を決めることは「予算」を立てるようなものである。食物が口に入った後、消化吸収がどんな様子かを知るとは、「決算」にたとえられる。「決算」を確認するのはよりよい「予算」を立てるためである。

最も直接的で簡単に「決算」を調べる方法は子どもの便を観察することだ。便が棒状で、柔らかく、するつと出るようなら、食事の組み合わせはよい。便がドロドロで泡が多いようなら、往々にして炭水化物の摂取量が多すぎる。

便が乾いて堅く、排便が困難なら、往々にして「高たんぱく」で「食物繊維が少ない」食事や、水分の摂取不足が原因であろう。

古人は排便を「川を行く船」にたとえている。「川」には水が必要で、3〜6歳の子どもでは、1日に1000〜1200mlの水を飲まなければならぬ。そして、「喉が渇く前に飲む」ことが大事である。

「船」を動かすには動力がいる。腸のぜん動運動を刺激する食物繊維がその原動力である。食物繊維は穀物や野菜や果物に含まれる。

子どもの献立では、必ず毎食に主食をとり、野菜を取り入れ、毎日果物を組み入れることを推奨したい。主食には、粗と細を組み合わせ（粗穀物には食物繊維が多く含まれる）、野菜、葉物を多めに、瓜や茄子類を少なめにするのがよい（葉物類は、食物繊維が多い）。

■飲食時には自己防衛、食の基礎知識

少しの油断や不注意、無知により、子どもが「食」が原因でけがをすることもよく起こる。

火傷、むせる、のどにつまる、突く、刺す、アレルギー、中毒などを防ぐこと、これらは子どもたちが飲食する上で自分で防ぐ力を身につけなければならぬもので、つまりは安全の「基礎知識」といってよい。

【火傷を防ぐ】

子どもには以下のことを教えなければならぬ。飲み物を飲むときは、まず手指でカップを触ってみて、熱すぎなければ飲む。スープを飲むときは、少し冷めるのを待ち、スプーンですくって口に入れ温度を確かめる。舌を火傷しないようなら飲んでよい。揚げたての物やとろみのついた卵スープ、熱々の豆腐などは、食べる前にまず息を吹きかけて、少し口に入れて温度を確かめてから食べるようにする。運ばれてくるそばから大口を開けて食べるようなことはしてはならない。

【むせるを防ぐ】

笑ったりふざけたりして食べていると、食物が気管に入りやすくなる。だから、食べるときは集中して食べるようにし、遊びながら食べてはいけない。

【つまるを防ぐ】

つまるとは、食物が食道やのどを塞いで、上にも下にも動かない状態を指す。よく起きるのは、モチや粽(ちまき)、ゼリー、バナナなど粘りがあつてつるんとしたものを丸呑みしたときである。

もしそんな大きな塊が食道につまったら、食道

の前方にある気管が圧迫され呼吸困難となり、一気に危険な状態に陥ってしまう。

【突き刺さるを防ぐ】

シシカバブやサンザシ飴など串刺しのものは、横にして食べさせ、食べている手が他人にぶつからないように注意させ、のどに突き刺さるのを防ぐ。人込みの中では、急いで食べないで、安全第一を考えたい。また、箸を口にくわえたままにさせない。これは見苦しいし、危険でもある。

【刺さるを防ぐ】

3歳までの子どもには、魚の小骨や肉の骨、棗(なつめ)のさねなどは取り除いておく。3歳以降は、小骨、さね、骨を吐き出すように教える。そして、ご飯とおかずを口に入れて、それを飲み込んでから魚を食べるとよい。魚だけを口に入れるのは小骨が刺さりやすい。

【アレルギーを防ぐ】

もし、子どもがアレルギー体質であれば、他人からももらったものを食べたり、自分でおやつを買って食べたりにしてはいけないことを常々言い聞かせておこう。「口にしてはいけない」食物を、子どもにはつきり教えておくべきである。

【中毒を防ぐ】

花や草を口にくわえたり、鉛筆をくわえたりさせない。匂いを嗅いだり、見たり触ったりすること、食物に腐敗や変質がないか見分ける力を教える身につけさせるようにする。

■ルールを守って、心身ともに健康になる

「食べる」ことにおいて子どもにルールを守らせる。例えば、分け合うことや譲ることを知り、「独り占め」して食べてはいけないというルールである。

スイカを切り分けると、子どもはどれも先っぱの甘い部分だけをかじって甘くない部分を親に残したりする。この「先っぱかじり」現象は、実は一種の溺愛である。これでは、分け合うことや譲ることを覚えられはしない。

風邪で発熱し、小さな顔が赤くなり、食欲もない子どもを見て、保護者は心配でたまらない。お母さんは一杯の卵スープを運んできて、子どもにこう言う。「これはあなたのためだけに作ったのよ、お父さんは食べてはだめよ」。お父さんは、傍らで進んで協力するが、よだれが出そうな様子である。このような過保護なやり方で、子どもは、恩を感じて親孝行をしようと思えるだろうか？ 分け合うこと、譲ること、恩を感じることを知らないで、健康な心の子どもといえるだろうか？

食育とは、子どもが「食べることで健康をつくる」ための鍵となるものである。健康という概念には心と体が含まれていなければならない。

子どもの

早期

能力開発

2

華東師範大学教授 朱家雄 (Zhu Jiaxiong)

■はじめに

子どもの脳は、さまざまな要素によって機能し、発達していく。食べ物による栄養、言語・情緒の情報、親子のコミュニケーション、スキンシップ、身体運動、遊びなどの影響を受けながら、成長していく。

今日は、子どもの早期能力開発における基本的な考えや個人的な意見について述べるので、皆さんの育児の参考にしていただければと思う。

■早期保育と教育のポイント

早期保育と教育について、まず、以下の重要な

ポイントを押さえておきたい。

- (1) 質の高い親子の絆をつくる必要がある。幼い時期から、幼児教育施設や祖父母のところに預けてしまうと、親子関係の絆に影響する。
- (2) 乳幼児期にコミュニケーションをとる機会を増やす。乳幼児がまだ話せないときでも、言葉による働きかけが必要であり、スキンシップも非常に大切である。
- (3) 子どもの年齢や発達レベルに合わせた活動をする。子どもにはそれぞれ個性があるので、教科書通りに、何ヶ月になったら、何かができるという目安にとらわれないで、自分の子どものレベルに応じて、刺激を与え、活動をする。
- (4) 子どもの興味関心について、励ます。子ども

がどのようなことに興味を示しているかを観察し、それを励ますことによって、子どもの興味を深める。

- (5) 保護者と専門家の一対一の双方向コミュニケーションをとる。0～3歳の早期教育施設では、教員の質のばらつきが課題である。

■育児における重要なこと

1. よい親子関係の構築

親子関係は乳幼児の発達にとって、最も大事な要素ともいえよう。親は子どもにとって安全な基地であり、子どもの発達の基盤となる。親子関係を築くには、アイコンタクト、スキンシップ、親

子間で交わす言葉、感情の交流など、さまざまな方法がある。

2. 言語の発達と開発

乳幼児はまだ話せないもので、彼らと話しても無駄と思わないでほしい。乳幼児に積極的に言葉で働きかけ、目線、表情、音、動作などを組み合わせて、子どもと双方向のコミュニケーションを図ってほしい。

子どもに働きかけるときには、童謡、歌、詩、ことわざ、早口言葉など、言葉のゲームを取り入れながら、リズムのいいものを選び、子どもの興味関心を引きよせ、何度も何度も繰り返していくことに意味がある。

家庭や幼稚園の中で、話し言葉で子どもと交流することは、表現力を培うことにつながるのである。

読書の効果も注目しなければならない。よい図書を選ぶことによって、子どもは絵本の中から自然にいろいろなことを学んでいくことができる。

ひとつ例をあげる。日本の絵本で中国語に訳されたもので、「わたし」という絵本がある。

「わたしは山口みち子、5才。

お兄ちゃんから見るとわたしは「妹」。

男の子から見ると、わたしは「女の子」

(中略)

犬から見ると、人間……」

わたしは1人なのに呼び名はいっぱい。この絵本は社会関係を楽しく描いている。

3. 子どもの思考力の発達と開発

子どもには、知識を教えると同時に、日常生活や遊びの中でも、数的な概念や思考力が培われるような工夫をする。子どもには同じものや違うものを探させたり、上下左右前後といった方向感覚、大きい、小さい、丸、四角などの形状認識、1番、2番、最初、最後の順序概念などを、遊びながら習得させる。

子どもの発達はそれぞれ異なっていて、個性もそれぞれ違う。ご自分の子どもに一番合う方法で、自らの力ぎで、可能性に満ちたあなたの子どものドアを開けてほしい。



早期教育について

Q 5歳の子どもがいます。習い事や早期教育を受けさせたい気持ちもありますが、子ども時代は楽しく過ごさせてやりたい、自然に触れさせたいという気持ちもあります。そこで、朱先生にうかがいたいのですが、早期英才教育はどの程度必要でしょうか。

適切な教育は、適切な消費と同じで、1つの知恵です。現在、かつてないほど「早期教育熱」が高まっていて、さまざまな「習い事」があります。一人っ子の時代ですし、親の期待も大きいのです。そんな中で、親たちの、自分の子どもに、何でもできる子になってほしいと思う、その気持ちも理解できます。私も息子に期待し、彼が成功して役に立つ人材になってほしいと思いました。

しかし、いまは孫娘がいる身になって、祖父という立場から、少し

会場での質疑応答



心情が変わったのです。本人がやりたいようにやらせたいという気持ちに変わったのですね。

こうした心理の変化は、同じ家族でも価値観が違ふという証明です。最終的に子どもが成功するか否か

は、親の期待度にもよるでしょう。そこで、いまのご質問に直接的な回答をするならば、我が子を最も理解しているのは会場の皆様ですから、その子がどの分野に長けているか、また興味のある分野があれば、それ

を伸ばすように工夫すれば十分だと申し上げましょう。ただし、詰め込みすぎはいけませんので、適度のバランスが必要です。親の英知におまかせします。

Q いま、子どもに唐詩など古典作品を暗記させる親が多いのですが、暗記は子どもの論理的思考の発達に影響があるのでしょうか？

朱 いまのところ、その影響を証明する研究はまだありません。多くの学者は暗記が子どもの発達にいいことだといっていますが、逆に何の効果もないという学者もいます。見方がはっきり分かれており、学術界でもまだ論議を呼んでいる問題です。

子どもの学習において、詩の暗記については、小さなうちに、やらせる価値があるかどうかの判断は個人個人で違います。価値があると思えば、子どもに楽しく学ばせる、これはよいことでしょう。ただし、自由放任は必ずしもよいことではありません。

せん。私の主張というのは、「一人の子どもを1つの鍵穴にたとえ、彼らに適した鍵を探して、可能性を開かせる」ことが大事なことです。

個々の問題に合った対処法を考え、知恵を使って子どもを教育してほしいのです。ですから、私の本にはたくさんのお話や物語が出てきます。他人の話の中から自分に合った教育方法を悟ってもらえればと思います。

Q 21か国が参加した統計調査で、中国の子どもは想像力では最下位で、創造力では第5位、計算力は第1位だったそうです。受験教育システムのもとで、子どもの想像力を向上させるにはどうすればよいでしょうか？

朱 まず、申し上げたいことは、これもやはり我々教育に携わる者が、たゆまず追求している問題だということです。もちろん、この統計のデータについてそんなに気にする必要はありません。想像力自体は、

知識と密接な関係があり、幼稚園の子どもや小学生と大学生では1つの円に対する認識が異なります。つまり知識が蓄積されていくに従って変わっていくもので、想像力の限界を意味しているわけではありません。中国の文化は思考の独創と広がりやを抑制するものなのでしょうか？ 私は違うと思います。西側の文化は分かれる文化で、専門化した文化ですが、中国の文化は、和の文化、和階（調和）の文化で、全体として問題を考えていく文化です。ある文化が想像力を抑制しているということはありません。中国では、子どもはまず適応することが求められ、まわりの環境から抜けだし奇想天外なことをすることはできません。しかし、このような環境文化の中でも、想像力のある子どもはたくさんいます。

子どもの健康について

Q 冬になると子どもは繰り返す風邪をひきます。厚着か

薄着はどっちがいいですか。また風邪をひいてしまったときに、どうすれば、いいですか。家庭でできることを教えてください。

万 風邪は、実際に小児科でも多く見られる病気で、「冬から春は風邪で、夏は下痢」とよくいわれます。風邪というのは「諸刃の剣」なのです。もし、一日中温度と湿度が一定に保たれた温室のような環境を作ってしまうと、弱々しい子になってしまいます。入園したてや、お休みの後に久しぶりに登園したときなど、風邪ひきや発熱を起こしやすいですね。なぜ「諸刃の剣」かというと、風邪をひく度に、体内の免疫が戦いの洗礼を受けるからです。あまりに頻繁に風邪をひく子どもを特に「風邪を繰り返す子ども（Duplicate feeling）」といいます。診断の基準は1つに頻繁であること、2つにその他の肺炎や気管支炎などの病気を引き起こし、症状が比較的重いことです。

風邪の防止策としていえば、子ど

もにとっては「厚着も薄着もしない」のがよいのですが、大人でいえば「春になっても急いで薄着にならず、秋になっても慌てて厚着をしない」ということです。冬にチョッキを着れば胸と腹を保護できます。その他、靴も保温性が必要です。「寒さは足下から」伝わるものですから。頭に汗をかいたら、すぐに拭き取りましょう。新年や祝日のときなどには、新しい帽子に新しい服を身につけますが、特に帽子は家に帰ってから脱ぐのが惜しくなりますね。しかし、汗をかいた後は風邪をひきやすいのです。

飲食については、大いに工夫の余地があります。冬から春にかけての風邪は、ほとんどがウイルス性の風邪なので、日常の食事では、白菜類や青梗菜、ナズナ、ブロッコリー、カリフラワー、大根類といったアブラナ科の野菜を多くとるとよいでしょう。また、身近な漢方薬である板藍根なども効果があります。

なぜ、これらが予防に役立つのでしょうか。それは、これらの野菜類

には、インターフェロン生産誘導剤が含まれているからなのです。体内のインターフェロンの生産を誘発して、ウイルスの複製を妨害できるのです。だから、皆さんの買い物かごにアブラナ科の野菜が多めに入っているれば、それは大変よいことなのです。

また、冬から春に「防寒に役立つ無機塩」として賞賛されているのが鉄ですね。鉄分がもし十分にあれば、余った分は肝臓に貯蔵されます。天候が急激に変化したときなど、備蓄された鉄分が肝臓から放出され、赤血球を作りだす原料の1つになって、赤血球の酸素運搬能力を高め、抗体を潤すことができます。さらに非常に重要なのが「便通」です。「もし子どもを落ち着かせたければ、腸をきれいにするべし」ということで、古人は排便を「河を行く船」にたとえています。冬は特に水を多くとり、喉が渇く前に飲むようにします。そして、「動力」として、水分をとることで胃腸のぜん動運動を促します。

便秘、のぼせ、発熱は三部曲といえます。そこで、温度の調整をし、冬は決して長時間温室にこもらず、毎日冷たい空気に触れ、必ず風通しをよくしましょう。

みんながウイルスが空気感染する点を重要視していた時期がありました。窓をしつかり閉めて、汚れた空気を入れないようにすればどうかと言った人がいましたが、それは感心しません。風邪は飛沫感染ですが、大人の喉のウイルスは、くしゃみなどにより空気中に噴き出て、子どもに吸い込まれることで、風邪を引き起こします。しかし、室外の埃は風邪を引き起こすことはありません。だから、換気に注意しなければなりません。温度調節をしつかりとして、飲食に気を付けていけば、風邪は予防できます。

しかし、子どもが風邪をひいてしまっても、心配はいりません。発熱が問題ではないのです。幼稚園に入る頃には、子どもは、一般には発熱しても脳卒中は引き起こされません。熱を下げるには、絞りたての果

汁を加えた水をたくさん飲ませ、ビタミンCを増やし、抗体を増やし、薄味の物を食べます。そうすれば、風邪をひいても大したことはありません。

榊原 私は小児科医ですので医者

の立場からこの質問についてお答えしたいと思います。万先生がおっしゃったように、風邪はウイルスが体の中に入って起こる病気です。200種類以上のウイルスが風邪を引き起こすことがわかっています。一種のウイルスが入ると、体の中に抵抗力ができて、同じウイルスではもうかからないです。ほかのウイルスが入ってくると、抵抗力がないのでまたかかります。幼稚園に通い始めると、いままでなかったことがないウイルスが人から人へうつり、風邪にかかります。そのほとんどが鼻から入るのです。だから万先生がおっしゃった通りに、部屋の空気を入れ替えることで空気をきれいにすることが必要になります。もちろん、野菜、ビタミンCなど

の栄養素が入っているものを食べると、抵抗力がついて、簡単に風邪にかからなくなります。しかし、風邪を防ぐ一番の方法は、1つしかないです。それは手をよく洗うことです。

他人のウイルスがどうやって自分の口に入るかというと、ほかの人が咳やくしゃみをして唾液がティンブルや家具につき、知らずにそれを触って、続けて口と鼻を触ると、ウイルスがうつるのです。万先生がおっしゃった下痢ですが、下痢も同じようにウイルスや細菌が口から入るのです。手を洗うことで、風邪や下痢を減らすことができます。このことは科学的に証明されています。ある調査により、手をよく洗う幼稚園とそうでない幼稚園と比べると、よく手洗いうる幼稚園で下痢と風邪が減ることがはっきりわかっています。

Q

榊原先生にお聞きします。中国では、風邪の子どもに点滴をすれば、早く治ると言っていますが、日本では、子どもが風邪を

ひいたときにも点滴をすることがありますか？

榎原

子どもが風邪をひいたとき、水を飲むことができるなら、点滴はする必要がありません。水をたくさん飲ませて水分を補えば、点滴と同じ効果を得ることができます。

Q

現在、アレルギーの子どもがますます増えています。原因は何でしょうか？ 環境汚染に関係があるのでしょうか？ 治すことはできるのでしょうか？

榎原

アレルギーについては、私の恩師である小林登先生が専門です。アレルギーは1つには体質と関係があります。それから、食物と関係があります。確かに現在の環境汚染が影響してアレルギーになりやすい子どもがますます増えていると思われます。

小林

少し補足しておきましょう。空気についての問題ですが、現

在きれいな空気がますます減っているため、大気汚染と直接関係のない花粉も含めて、地球全体でアレルギーが増えています。喘息では細かいほこりが気管支を収縮させますが、慢性化すると回復が難しくなるのです。それは、気管支の粘膜が特殊な炎症を起こすからと考えています。したがって、炎症の治療が重要になっていきます。いま、日本ではヨーグルトや納豆もアレルギーの予防に有益だという研究報告も出ています。

万

アレルギーは一種の免疫反応です。体が無害な物に対して、過度の反応を起こすのです。どのように対応するかというと、探す・避ける・治すの3つの言葉で解決します。まず、アレルギー源を探し、アレルギーを引き起こすものを極力避けるのです。ただ親が治療を怠るかもしれません。アレルギー性鼻炎に対しては、保護者がすぐに治療を受けさせてやらなければなりません。

子どもの性格と行動について

Q

子どもの多動性について、どのような判断基準がありますか。

榎原

研究によりますと、5%、8%の子どもは多動性があることがわかっています。けっして本人に悪気があるわけではなく、どうしても集中できない、静かにできない、気が散ってしまうという生まれつきの特徴をもっています。多動が目立つと、親や先生が「やめなさい」と止めます。ただいつも叱られてばかりいると、自信がどんどんなくなって、成年になっても、自信がもてないことがわかっていきます。だからこのような子どもに対して、けっして一方的に叱るのではなく、いいところを見つけてはめてやるのが大事です。本人の自信を高める研究は日本やアメリカの専門家が一所懸命取り組まれています。

Q

子どもが短気な性格なのですが、どうすればよいですか？

朱

発育の段階で癇癇を起こしやすいことたりすることは正常なことです。もともととはおとなしい性格だったのが、癇癇を起こすようになる時期があるかもしれません。それは、発育過程の自然な現象です。癇癇の程度がどのくらいか、情緒障害を起こしていないか、この問題をどう解決するかですが、私は、これは病気ではないと思います。少なくとも薬で治すのではなく、親御さんの知恵と教育によって解決してほしいと思います。

榎原

私も朱先生のお話に同感です。正常な子どもと情緒障害は本当に紙一重であり、誘因があるかどうかで両者の違いがはっきりします。子どもが何の誘因もなく、理由が全く見つからないのに癇癇を起こす場合に限って情緒障害と見なすことができます。

会場の声



小林登教授 の講演について……………

○小林先生のご講演は大変わかりやすく、将来の教育の在り方に対する考えや示唆が与えられる貴重なお話でした。

○教育と文化という2つの情報、そして、その2つの情報が子どもの発達に及ぼす影響がわかりやすく論じられていました。

○医学のことはあまり詳しくないのですが、小林先生は生物学の角度から就学前教育の問題を説明してくださり、とても意義深かったです。

○解剖学、生理学の研究も子どもの発達にとって重要であることを認識させられました。

秋田喜代美教授 の講演について……………

○秋田先生の研究を興味深く聞かせていただき、大変勉強になりました。先生の研究は実用性が高く、

中国の幼児園と小学校の接続の問題に対して、たくさんヒントを与えてくれました。

○国の事情が異なると教育も大きく変わります。ドイツ、イギリス、台湾、日本などの実例により幼小接続の各国の実情をわかりやすく話してくださり、とても印象に残りました。中国における幼小接続の問題について、実践的なヒントを得られて、大変感謝します。

○講演は大変わかりやすく、日本の幼小接続の問題についての対応や、効果的な解決方法などについて知ることができました。

○発表の内容が豊富で興味深く、たくさんヒントが潜んでいました。また、日本の就学前教育の最新情報も知ることができました。

榊原洋一教授 の講演について……………

○「特別支援教育」という言い方は、とてもいいと思いました。教育の公平性を強調していて、正義が感じられます。また、障害児を一人前の子どもであり、かつ、特別なニーズがあるのだとする考え方に共感します。

○先生の発表のレベルはとても高かったと思います。科学研究の成果を詳しく述べられ、論旨も明確でポイントがよくわかりました。

○発達障害の問題は社会的に注目される課題であり、挑戦していくべき課題でもあります。脳科学の領域から「特別なニーズをもつ子ども」の教育を考えることは、私の視野を広げてくれましたし、とても勉強になりました。また、これらの知識は実践に大変役立つと思います。

朱家雄教授 の講演について……………

○わかりやすい言葉で深い内容を述べられていました。

○幼児の積極性、社会性の発達を促すことで、小学校生活への適応に役立つことがわかりました。

○朱先生の発表に同感です。先生が中国の国と国民のことを深く考え

られ、真剣に悩んでいる姿に敬服しました。しかし、具体的な問題解決方法については、今後検討していかなければいけないと思います。

○先生が指摘された「経済レベルの高いところは、子どもの遊ぶレベルが低い」という矛盾について考えさせられました。

馮曉霞教授 の講演について……………

○深く研究されていて、社会的な意義を感じます。講演は大変素晴らしく、説得力がありました。

○「社会的立場の弱い階層」に焦点を当てた素晴らしい講演でした。ありがとうございました。教育の機会均等を促進するために、まずは幼児期の教育を重視し、「スタートラインから遅れをとらせてはいけない」という観点をもつことには賛成です。

張燕教授 の講演について……………

○張先生の発表に感激しました。自らボランティアとして農民工の子どもたちに就学前教育の実践を行い、そして政府の政策は就学前教育に有利な方向に傾斜すべきという立場から、庶民の就学前教育問題を論じられました。張先生は地道な研究をなされながら、教育実践においては強い情熱を感じました。

○実践もあり、マクロな視点もありました。実践を行い、現実問題と理論を結びつけて示唆に富む発表でした。

王練副教授 の講演について……………

○わかりやすく、データや写真がたくさん提示されていました。就学前教育を直観的に理解するため素材が豊富に提供されました。データをもとに語ってくださっていますので、大変説得力があり、

この調査結果からもいろいろと考えさせられました。

○就学前教育に熱い思いをもち、現実の問題を解決しようとしていて、興味深い発表でした。

周念麗副教授 の講演について……………

○自ら貧しい地域に赴き、調査したことや、この調査結果に関する分析や考え方に深い感銘を受けました。まず、貧困地域の子どもたちへの愛情が感じられました。ちよつと残念なのが時間が短かったことで、もっと具体的な話を聞きたかったです。

○感情をこめてわかりやすく説明していただき、忘れられない講演でした。

○実際の現場で仕事と探索をなされ、その結果を調査分析に、解決策を提示するという、とても実用性の高い発表でした。

郷平園長

の講演について……………

○具体例を通して幼児園と小学校の接続のやり方を説明していただき、とてもよい勉強になりました。

○小学校からのフィードバックがあれば、さらによいと思います。

育児公開講座

万鈞教授

の講演と質疑応答について

○私は自分の子どもに食べさせる質と量について悩んでいましたが、万先生の話を聞いて、どうやって子どもが健康的に食べられるかわかりました。

○「食育」の系統的な知識を教わりました。専門的で話がわかりやすく、実用性がとても高いです。

○ポイントが明確で、言葉遣いにはユーモアがあつて、とてもわかりやすいです。

○「生後初期に栄養過多になると、新陳代謝が正常ではなくなる」と「や、「アブナ科の野菜が病気を予防すること」などの知識がわかって、大変勉強になりました。

朱家雄教授 の講演と質疑応答について

○素晴らしいです！ 大変わかりやすい内容で、実用性の高いアドバイスでした。

○「1つの鍵穴には、1つのキー」という理論が大変勉強になりました。周りの人と比べたり合わせたりせずに、自分の子どもにとって最善なやり方を見つけるのが、親の知恵であると認識させられました。

○先生の講演は大変誠実な内容で、ロジックもしっかりしており、ま

た質問に対する答えにも大満足でした。

神原洋一教授 の質疑応答について

○榊原先生の答えは非常に専門性が高く、医学的知識がたくさん入っていますが、わかりやすく説明してくださるし、実用的なので、私はとても満足しています。

○先生の研究姿勢はとても誠実で、しかも実践的です。

○このシンポジウムに参加する前には、どんな内容になるのかわかりませんでした。実際に講演を聞いてみると、素晴らしい内容だったので、来てよかったと思います。

子ども学についての 期待

○子ども学は単なる生物学、心理学から出発する学問でもなければ、教育学から出発するものでもない。

い。今回の講演を聞いて、子ども学の多様化を感じました。子ども学を応用して、子育ての親や子どもを支援し、手助けしてほしいです。

○子ども学について新しい発見がありました。それは、子どもの研究は多くの視点から研究することができるといことです。子ども学は心理学、医学、特に脳科学のサポートが必要です。このような研究をますます深化させていきたいと願っています。

○子ども学は今後の子どもに関する研究の主流となっていくでしょう。中国での展開に期待します。

○「子ども学」はサイエンスの面に特化した学問と思っていましたが、こんなに多くの領域とかわっていると、知りませんでした。大変面白い学問であり、幼児教育の仕事以外にも多く知らせたかったです。



日本 グッド・トイ 展示会

子どもたちの健やかな成長発達には、栄養が不可欠である。その栄養は「食事」からだけでなく、「遊び」からも得られる。子どもは遊びを通じて、心や体の能力を高め、広い世界へと想像の翼を羽ばたかせ、自分自身についても知るようになる。遊びの中で、個性が育まれ、自主性や忍耐力が自然と身に付き、いろいろなことを学んでいく。そして、子どもにとって大切な「遊び」に欠かせないものが、おもちゃである。

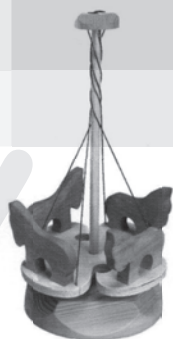
私たち大人は、おもちゃを、感性や想像力、好奇心の育成を手助けしてくれる大切な道具と考え、子どもの成長に合わせ、さらに五感でさまざまな刺激をキャッチする可能性を引き出してくれるおもちゃを選んであげることが必要である。

この展示会は、東京おもちゃ美術館館長、日本グッド・トイ委員会理事長の多田千尋氏の監修のもと、日本で流通するおもちゃの中で、優秀なおもちゃに贈られる「グッド・トイ賞」受賞作品の中から、心や身体の成長に必要な「イマジネーション力」、「自然や科学への好奇心」、「音楽アートな感性」、「運動能力」、「コミュニケーション力」の栄養素を育むことができるものを50数点厳選し、紹介した。

● 2010年11月23日、24日の2日間にわたり、東アジア子ども学交流プログラム会議と合わせて、北京中華女子学院にて、日本グッド・トイ展示会が開かれた。大学の学生や教師を中心に、2日間で延べ1500名ほどの来場者があり、皆が熱心に研究している姿が印象的であった。

会議の前後や、お昼休みなど、会議の合間を利用して、会議に参加した学生、現場教師、大学の先生、幼児をもつ親が、おもちゃ展示スペースに集まって、パネルの説明を読みながら、実際のおもちゃを触って、遊び方を熱心に研究していた。会場アンケートからも見てとれるように、最も印象に残った内容の1つに「グッド・トイ展示会」があった。参加された方々は、展示されているおもちゃのデザイン、発想に感動し、会場では子どもに創造性、芸術性を育むことができるツールとして大きな関心が示された。

● 今回の展示会は2日間という短い期間であったが、日中の学者が大学の学生と、「子どもとおもちゃ」、「子どもの遊びと学び」について考えるひとつのよい機会となった。



GOOD TOY

東アジア子ども学交流プログラムの概要

■開催趣旨：育児・保育・教育に関係する東アジアの大学、教授の相互交換講義を支援し、子ども学の普及と国際化を目指す。その結果、子どもを取り巻く諸問題の解決や環境改善に役立つような学術活動を推進する。

■主催：チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）、華東師範大学

■共催：(株)ベネッセコーポレーション
ベネッセ次世代育成研究所

■後援：中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議など

■事務局：チャイルド・リサーチ・ネット
(<http://www.crn.or.jp>)

本プログラムは、2007年11月に上海華東師範大学で発足し、長沙、東京、杭州、東京、上海の開催を経て、2010年には、北京で活動を行いました。本書は2010年の報告です。

- [発 行 日] 2011年3月31日
[発 行 所] チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）
〒163-0411
東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビルディング 13階
[編 集 人] 後藤憲子
[編集スタッフ] 劉愛萍、横井理絵、山本和桂子、
桜井玲子、木下編集事務局
[翻 訳] 村田久美子、岸多恵（中国語→日本語）
[デ ザ イ ン] 森一典デザイン事務所、富田淳子

無断転載・複写を禁じます。

Copyright (c) 2011, Child Research Net (CRN) . All Rights Reserved.